

# 詳説世界史図録 第5版

## 解答例・解説

### p.20~21 特集 記録の歴史

**テーマの問い** 多様な文字が創出され、紙や印刷術などの開発でこれらが継承されてきた。さらに写真や映像が開発され、近年、電子化によってより多様な表現や巨大な情報の保存が可能になった。

### p.22~23 特集 地図にみる世界認識の変遷

**テーマの問い** インド洋が閉じられていたり、南方に未知の大陸が描かれたりしてきた。

**2 ポルトラーノ図** 港にコンパスをおき、方角やルートが確認できるように放射状に16~32本の線が記されている。また、沿岸部の地名が詳細に入っている。

**3 マテオ=リッチの「坤輿万国全図」** 東南アジアや日本、および北米西北部が不正確で、南方には巨大な大陸(古来「南方の未知の大陸」と呼ばれていた)が描かれている。

### p.24~25 特集 世界の宗教

**テーマの問い** 信仰や儀式に独特な様式をみせるほか、食生活や芸術などにも宗教上の影響がみられる。

**2 宗教と食生活** 肉の摂取・調理に禁止・制限がみられている。

**4 世界史における宗教** 地域的に拡大するなかで分裂したり他の宗教と関連しあったりした。

### p.26~27 特集 感染症と世界史

**テーマの問い** 戦争や交易など人々が接触、交流した場面で病原体がうつされた。

**2・1 モンペリエ大学での医学の授業** 古代ギリシアやローマを代表する医学者の業績を継承しながら、イスラーム医学が集大成され、これらがヨーロッパに伝えられたことを表している。

### p.28~29 特集 地球環境と歴史

**テーマの問い** 寒冷化が社会の危機をもたらしたり、人類による環境への負荷が地球の温暖化による人類の将来への危機をもたらしたりしている。

**1・2 14世紀と17世紀における地球環境の変化** 14世紀中頃に寒冷化し、17世紀に再び寒冷化が進んだ。生活環境の悪化は歴史に大きな影響を与えたことが推測される。

**3 テムズ川の水質汚濁** テムズ川の主は汚れた川を表しており、ファラデーは鼻をつまみながら名刺を渡して挨拶している。

### p.30~31 特集 先史の世界

**テーマの問い** ティグリス・ユーフラテス川流域から地中海東岸の西アジア地域。

**3 先史時代の遺跡** アフリカで猿人の遺跡が発見されている。

**4 サハラロックアート** 人々とともに整然と描かれている様子から動物は家畜と考えられ、牧畜がおこなわれていたと思われる。

### p.32~33 古代オリエント文明とその周辺① メソポタミア

**テーマの問い** 楔形文字はシュメール人が開発したとされるが、アッカド語やヒッタイト語などメソポタミアに進出した諸民族の言語の表記に借用され、粘土版に専用のペンで刻印されるなどして、この地で3000年に渡って使用され続けた。

**2 神殿のレリーフ** このレリーフはバターButterの製造場面を表したものと考えられており、右側の2人は牛乳を濾して壺にためている。

**3 ハンムラビ法典** ものの取引や婚姻において契約・手順が重視されていたことがわかる。復讐法の原則からは、身分制社会であったことがわかる。

**3 円筒印章** 粘土板に転がして文字や絵図を写し取る。書簡や容器の所有者や主体を示したり、封印用の印章とされた。

**4 カルケミシュ出土のレリーフ** ヒッタイトの戦車である。2人乗りで二輪、車輪が6本スポーク式だったため、軽くて速かった。

### p.34~35 古代オリエント文明とその周辺② エジプト

**テーマの問い** 砂漠と海に囲まれており、異民族の侵入が少なかったため。

**2 死者の裁判、ミイラ** 靈魂の不滅・復活を信じたため、ミイラとして肉体を保存したり、死後の復活を願ったりした。

**3 アテン神信仰** 従来神々は人や動物の姿で描かれたが、アテン神は日輪と太陽光線で表現された。

### p.36~37 古代オリエント文明とその周辺③ 東地中海世界・エーゲ文明とオリエントの統一

**テーマの問い** 「海の民」の進入によりエジプト・ヒッタイトの勢力が後退した。また、「海の民」の活動がミケーネ文明滅亡の一因であるとする説もある。

**1・2 フェニキア人の商船** 造船や輸出のためにレバノン杉を運んでいる。レバノン杉は『旧約聖書』にも建材や舟の帆柱として登場する。

**2 ミケーネ城塞の獅子門、ミケーネ出土黄金マスク** 城壁や城門は堅固な石造りとなっており、またマスクが黄金でつくられていることから、軍勢力への高い関心や王の権力の強さを確認することができる。

**3 アッシリアの戦争** 石を落として戦っている様子がわかる。専門的な兵器を使用していないことから、彼らはもともと兵隊ではなく、普段は農民などの身分であることが推測できる。

**3 クシュ王国のメロエ遺跡** ピラミッド建造の文明を引き継いでいる。

### p.38~39 南アジアの古代文明

**テーマの問い** 南アジアはモンスーンとヒマラヤなど世界最高峰の山々の影響で、地域によって降水量が異なる。カイバル峠をこえてパンジャブ地方に進出したアーリア人は、その後、より肥沃なガンジス川上流へ移動し、稲作をおこなって定住の農耕社会を形成していった。農耕社会への移行とともに、社会の中に階層が生まれていった。

**2 インダス文字と踊り子** メソポタミア文明とインダス文明のあいだで交流が盛んであったと考えられる。

## p.40~41 中国の古代文明① 中国文明の成立～周

**テーマの問い** 多くの人員を動員する治水工事や北方遊牧民の侵入に軍事的に対応するため、巨大な政治権力が必要だったため。

**1 東アジアの風土と人々** 中国東部、日本、韓国、ベトナムは温暖・湿潤なモンスーン気候に属し水稻栽培に適して、人口と都市が密集した。とくに中国東部の淮河以南では徐々に開発が進み宋代以降中国経済の中心となった。淮河以北は雨量が少なく乾燥しがちで寒気が厳しかったが、黄河を利用した畑作がおこなわれた。北方の草原や砂漠地帯では遊牧がおこなわれ、遊牧民は交易もおこなったため、ユーラシアの広域に渡る交易路の発達をうながした。

## p.42~43 中国の古代文明② 春秋・戦国時代

**テーマの問い** 分裂の時代ではあったが、激しい競争のなかでそれぞれの地域に中央集権的な政治体制が成長し、鉄器や牛耕などの農業技術や貨幣経済が発展して新思想も現れ、のちの統一帝国の基礎がつくられた。

## p.44~45 南北アメリカ文明

**テーマの問い** 南北アメリカ文明では金銀・青銅器は用いたが、鉄器は用いなかった。また、車輪や馬も利用されなかった。

## p.46~47 中央ユーラシア 草原とオアシスの世界

**テーマの問い** 部族の連合体であり、強力な軍事力を有して統率力をもつ指導者が存在すると急速に拡大するが、指導者がいなくなったり、連合の必要がなくなったりすると分裂・消滅する傾向があった。

## p.48~49 秦・漢帝国① 秦・前漢

**テーマの問い** 秦は北方民族の侵入を防ぐために、戦国時代に築かれた長城をつないだ。漢の高祖は匈奴に敗北し、匈奴と家族関係を結び贈り物をした。以後、遊牧民と中華皇帝のあいだには断続的に交流がもたれた。武帝は、匈奴に遠征をおこなうとともに、西域の情報を集めた。

**1・2 「皇帝」号の使用** もともと、王を名乗っていたのは、周王のみだったが、戦国時代には王が複数存在することになった。かつ、秦王政の功績は五帝よりも優れているので、五帝以上の称号である皇帝を名乗った。

**1・3 秦の統一政策** 度量衡や貨幣、車軌の統一は、流通・交易の拡大に大きな価値をもち、文字の統一とともに中国文化圏の一体化に貢献した。

## p.50~51 秦・漢帝国② 後漢、漢代の文化

**テーマの問い** 官僚制と儒学思想に支えられた皇帝統治体制であり、周辺諸国に対しても名目的な君臣関係を結んで皇帝中心の秩序のなかに組み込んだ。

**1 宦官** 後宮で皇后や幼少期から皇帝に仕えているため、側近として政治上の実権を握ることがあり、後漢・唐・明などの王朝ではとくにその弊害が大きかった。一方、『史記』を著した司馬遷(前漢)、製紙法を改良した蔡倫(後漢)、南海遠征を率いた鄭和(明)など、歴史に足跡を残した宦官も存在した。

**2 豪族の邸宅をかたどった陶器俑** 防備を固めるため。漢代の経済発展による格差の拡大を背景に、土地兼併などを通じて勢力を伸ばし、多くの農民や奴婢を支配下においたのが豪族である。豪族は、地域の商業の実権も握ったが、やがて官僚になり、中央の政界へも進出した。豪族が勢力を拡大した背景には、彼らが私兵や武力をもち、支配力を維持したことがあげられる。邸宅の形は、豪族の武人としての一面を示す

ものだろう。

## p.52~53 中国の動乱と変容

**テーマの問い** 華北で遊牧民の政権が生まれた。北魏は漢化政策をおこなった一方、隋唐にも受け継がれる制度を生み出した。また仏教も反映した。一方、遊牧民の侵攻から南方に逃れた漢民族が、独自の文化を生み出した。

**1・4 江南の開発** 華北より戦乱から逃れてきた人々が大量して江南に移住してきたから。

**1・5 北魏の騎馬戦士陶俑** ズボンのような形状。馬に乗るために必要な服装であった。

**2・4 陶器「帰去来辞」** 役人のように生活のためにやりたくないことをやるのではなく、田園の自然に囲まれ、酒を飲んで過ごす暮らし。

## p.54~55 東アジア文化圏の形成① 隋唐帝国の形成

**テーマの問い** 隋は大運河を建設することで、経済的に発展していた江南地域と、政治の中心である華北をつなぎ、南北が分業する体制の基礎を築いた。また、貴族の権力を抑制し、中央集権を進めるために、郡を廃止し州県制をおこない、地方行政の簡素化をおこなった。また中国全土から広く人材を集める制度として科挙をおこなった。隋は中央集権的な統一国家をつくらうとしたといえる。

## p.56 東アジア文化圏の形成② 唐と近隣諸国

**テーマの問い** 吐蕃、新羅、渤海、日本など東アジア文化圏の国々は中国の影響を受け入れつつ、独自の文化を形成した。吐蕃は唐の制度を受け入れつつ、インドの影響を受けてチベット仏教やチベット文字を生み出した。新羅も唐の制度を受け入れたが、骨品制を基盤とした。渤海も唐の諸制度を受け入れたが、日本とも通交した。日本も遣唐使・遣唐使を通じて唐の制度を受け入れたが「日本」という国号や、「天皇」という称号を定めるなどした。一方で、唐は西方の国々から、様々な宗教や文化を受け入れた。

## p.57 東アジア文化圏の形成③ 唐の変容と文化、五代

**テーマの問い** 則天武後の時代から10世紀にかけて貴族はしだいに衰え、新興の地主層の力が強まったことで、形式化した貴族趣味を離れた個性的な技法を追求する動きが強まった。たとえば韓愈や柳宗元は、四六駢儷体を批判し、古文復興を主張した。

**3 杜甫「兵車行」** 唐の領土拡大政策のために徴兵され、出征する農民と家族たちの兵役の苦しみをうたっている。この漢詩は杜甫(712~770) 40歳頃の作品であるが、この頃から社会を批判する作品が多くなる。ちなみに唐が中央アジアの覇権を失ったタラス河畔の戦い(751)はこの詩のできるおよそ1年前、安史の乱(755~763)勃発はその約3年後である。

## p.58~59 突厥とウイグル、ソグド人

**テーマの問い** 中央ユーラシア一帯におよぶ交易ルートを築き、ビザンツ帝国など西方に組織物をはじめとする奢侈品を輸出するとともに、西方の文物や、ネストリウス派、ゾロアスター教、マニ教などを突厥、ウイグル、中国にも伝えた。また南北朝時代の北朝や隋・唐の外交官、官僚、軍人などもつとめた。遊牧民国家の外交官もつとめ、ソグド文字がもともとウイグル文字がつくられるなどした。

**2・1 突厥の碑文** 定住生活をせず、狩猟などで日々武芸を習得して強健であること。戦いにおいて、大軍相手でも都城にこだわらず臨機応変に対応できること、など。

**3 ウイグル王族の供養人像** ウイグル王族の服装をみると、

ゆったりとしたスカート状の上下一つなぎの服を着ている。馬に乗るのに適したズボン状の胡服を着ていないことから、もともとウイグルの人々が送っていた遊牧生活ではなく、定住化したことが想像できる。トルコ系の遊牧国家であった東ウイグル帝国が840年にキルギスの攻撃で滅ぼされると、河西回廊に甘州ウイグル王国と、タリム盆地に西ウイグル王国が建国された。その過程で、ウイグルの人々はオアシス地帯に移り住み、定住化し、農業・商業などをするようになった。

#### p.60～61 南アジアの統一国家と仏教・ヒンドゥー教の成立

**【テーマの問い】** 仏教は大乗系統、上座部系統などにわかれて、東南アジアや東アジアに伝播した。ヒンドゥー教はインドの民間信仰や慣習を吸収して徐々に形成され、社会に定着し、現在インドで最も多く信仰されている宗教となっている。

**4 ガンダーラ仏** 彫りの深い顔立ちや、ひだのある服装にギリシア的要素がみられる。

**3・2 グプタ美術** ギリシアの影響から脱し、なめらかな描写やみやびな表情など純インド的な特徴がみられる。

#### p.62～63 東南アジア世界の形成と展開

**【テーマの問い】** インドからはヒンドゥー教や仏教が伝播し、ベトナムでは中国から漢字や科挙などが伝わった。

**2 ポロブドゥール** これらの構造物はいずれもストゥーパ(仏塔)であり、円形に配置された小さめの構造物には内部に仏像がおさまられている。

#### p.64～65 イラン諸国家の興亡とイラン文明

**【テーマの問い】** ヘレニズム文化の影響が強かったが、ササン朝時代になると、ゾロアスター教や仏教・キリスト教を融合したマニ教がおこった。またササン朝時代の技術や様式は、西方では地中海世界、東方では日本にまで伝えられた。

**3・3 銀壺** うしろを振り向きながら弓を射ている(パルティアン=ショット)。

**3・3 銀壺・白瑠璃碗** 銀壺に当時の日本には生息していなかった動物を狩る騎馬遊牧民の姿が描かれていたり、白瑠璃碗のデザイン・形状がササン朝のカットグラスに似ていることから、ササン朝文化や中国の影響を受けていると考えられる。

#### p.66～67 ギリシア人の都市国家① ポリスの発展と変容

**【テーマの問い】** 山がちで複雑な地形のギリシアでは、大きな統一国家はつくられず、小さな都市国家が分立した状態で発達した。

**3・1 アテネの人口構成、3・2 スパルタの社会構成** アテネは市民が過半数いるものの4割近くが奴隷であり、民主政は限られた社会の中で営まれていたことがわかる。スパルタは完全市民が少数で、ほかの大多数は被支配民であり、強固な支配体制がしかれていたことが想像される。

**4 陶片追放** サラミスの海戦による勝利で名声を得て、民主政を脅かす存在になったためだと考えられる。

**4 ブニクスの丘** 民会において演壇として使用された。ペリクレスもここで演説をおこなった。

**5 ペリクレスの演説** 全体の利益を守るために、少数者の独占を排除して多数者の公平を守ること。

#### p.68～69 ギリシア人の都市国家② ヘレニズム時代、ギリシアの文化

**【テーマの問い】** ギリシア世界とオリエント世界を融合したという特徴。

**1 英雄視されるアレクサンドロス** 当時のローマは属州支配の拡大期であった。ローマが支配下の属州に「文明」を与え

るという、属州支配を正当化するためのイメージが、アレクサンドロスに投影されていたと考えられる。

**1 ギムナシオンの校長** 中央アジアにおいてもギリシア風の学校・都市が建設されたことを示している。

#### p.70～71 ローマと地中海支配① 共和政ローマ

**【テーマの問い】** 従軍によって農地は荒廃し、農民は没落し、活躍した騎士たちは領地を広げ、奴隷を使った大規模な農場経営をおこなうなど、市民のあいだの経済的格差が拡大していった。その結果、共和政の土台がゆらぎ、内乱の時代に突入した。

**2 グラックス兄弟の改革** これらの平民が兵力となって、ローマの拡大が進められているから。

#### p.72～73 ローマと地中海支配② 帝政ローマ

**【テーマの問い】** ローマ帝国は地中海全体を平定し、ローマ内部ではインフラが整備され生活が充実していった。

**4・3 スエトニウス『ローマ皇帝伝』が伝える宴会** 贅沢かつ飽食である様子。

#### p.74～75 ローマと地中海支配③ ローマの文化、キリスト教の成立と発展

**【テーマの問い】** キリスト教は皇帝崇拝を拒否していたために弾圧されていたが、帝国統一の維持のために公認され、そして国教となった。

**1 バンと見世物** 見世物はそれをみている民衆を一斉に満足させ、集団として権力の味方につけることができるため。

**3・2 「三位一体」** 白い鳩の姿で描かれている。

#### p.76～77 イスラーム政権の成立

**【テーマの問い】** イスラーム共同体(ウンマ)を率いるカリフを中心に政権は成立し、アラブ=ムスリム軍が中央アジア・インド西北部からイベリア半島までを征服して各地に住み着き、支配した。それらの地域ではアラブ諸部族の優位が保たれ、被征服地のイスラーム改宗者も人頭税(ジズヤ)や土地税(ハラジュ)といった税制面で差別されていた。

**2・2 メディナ憲章** メディナ憲章の最初に「ユダヤ教徒と取り決めに結び、契約を交わした」とある通り、ユダヤ教はイスラーム教にとって特別な存在であった。また「ユダヤ教徒のなかでわれわれに従う者は、援助が与えられ、同等に扱われる」と書かれており、イスラーム教徒に従う限りにおいて、彼らが支援され、同等に扱われたことがわかる。

**3・1 アラブの戦利品の分配** 史料を読むと「入信時期の早い者ほど、高額の俸給(アター)を受け取れるようにした」と書かれている。「われらより高貴な血筋の者がいるとは思えん。」という批判を受けてはいるが、血筋よりも入信時期が重要視されたと考えられる。また、俸給を受け取るためには、台帳(ディーワーン)に登録されることが必要だったこともわかる。

#### p.78～79 アッバース朝の成立と分裂

**【テーマの問い】** イスラーム共同体(ウンマ)の分裂は後ウマイヤ朝の成立に始まり、アッバース朝からトゥールーン朝やサーマーン朝が自立すると加速した。さらにシア派のファティマ朝が成立してカリフを名乗るとその分裂は決定的となり、同じくシア派のプロイフ朝が大アミールの称号を得るとアッバース朝カリフの支配は名目的となった。

**3・4 翻訳論** アラビア語の韻文である詩の翻訳は、その韻律の美しさを失ってしまうという点で問題があり、他の言語に翻訳することが不可能と考えられていた。一方で、アラビア語の散文を翻訳することは、それより難しいと考えられな

かった。また、アラブ人が有していた知識は他地域では既知の事項であることが多かった。

## p.80~81 特集 イスラームの教え

**テーマの問い** イスラーム教はムハンマドを政治的かつ宗教的指導者とする宗教であったので、そこには政治と宗教が一体化した世界が誕生した。また、彼らが『コーラン』を通じてアラビア語を共通語とし、また巡礼が五行の1つとして義務づけられていたことにより、文化的にも社会経済的にも結びつけられていた。

**2・1 預言者ムハンマドの最初の啓示** **Q** ムハンマドと唯一神(アッラー)は「預言者と神」の関係にある。そのため、アッラーはムハンマドに大天使ガブリエルを遣わし、神の言葉をたびたびムハンマドに伝えた。ムハンマドはアッラーの言葉を神の啓示として周囲に伝えていき、彼はやがてムスリム共同体(ウンマ)の預言者とみなされるようになった。

## p.82~83 ヨーロッパ世界の形成 ゲルマン人の移動、ビザンツ帝国の成立

**テーマの問い** 東ヨーロッパ世界では、ビザンツ帝国の皇帝がギリシア正教とギリシア古典文化を融合させた独自の世界を成立させた。一方、イスラーム政権の侵入を受けた西ヨーロッパ世界では、ローマ文明とキリスト教文化を継承しつつ、ゲルマン人の移動が開始されると彼らの文化も取り入れた世界が成立することになった。

**3・2 タキトゥス『ゲルマニア』** **Q** ゲルマン人社会の様子は、ローマ人が彼らについて書き記した『ガリア戦記』(カエサル著)や『ゲルマニア』(タキトゥス著)などで確認することができる。これらの史料によると、彼らは成年男性自由人の全体集会である民会に定期的に集まって協議し、集まった人々は自由に賛成・反対の意思を表明することができた。

## p.84~85 西ヨーロッパ世界の成立① フランク王国

**テーマの問い** フランク国王にローマ教皇が帝冠を授けて西ローマ帝国が復活するカールの戴冠は、ローマ古典文化とゲルマン文化、さらにローマ=カトリック文化が融合し、西ヨーロッパ世界の成立を象徴する事件だった。すなわち現代社会に大きな影響力をおよぼしている西ヨーロッパ世界が成立したという点で、世界史上意義のあるできごととなっている。

**2・1 西ゴート王国の滅亡** **Q** アラブ軍を主力としたムサ率いるイスラーム勢力のウマイヤ朝軍は、北アフリカを経由してイベリア半島まで進出してきた。これに対し、キリスト教の西ゴート国王ロドリゴの軍は全軍を招集して激しく抵抗した。この戦闘は間断なく続いたが、最後は敗北してロドリゴは死亡し、イベリア半島はイスラーム勢力の支配下におかれた。

**4 アンリ=ピレンヌ『マホメットとシャルルマーニュ』** **Q** ローマ帝国が東西に分裂し、東方ではその継承国家が成立した。さらにイスラーム勢力の侵入で北アフリカとイベリア半島を失ったことで、ローマ教皇の権威はフランク王国の領域にまで縮小した。その結果ローマ教皇とフランク国王が結びつくことになり、イスラーム勢力進出の刺激が西ヨーロッパ世界の成立をもたらした。

## p.86~87 西ヨーロッパ世界の成立② 外部勢力の侵入、封建社会

**テーマの問い** 西ヨーロッパの社会は、荘園を経済基盤としていた。ここでは領主のもとでもにも農奴が領主直営地と農民保有地を耕作し、賦役と貢納を領主におさめた。領主たちのあいだでは、主君が家臣に封土を与え、家臣が軍事的奉仕の義務を負う封建的主従関係が取り結ばれた。この主従関係は双

務的契約であり、支配体制は地方分権的であった。

**3・1 農奴の諸義務** **Q** 領主に求められる仕事を普段は週に2回、収穫時などの繁忙期には週に3回仕事しなければならない。また、祭りの際などには収穫物や貨幣をおさめなければならない。それだけでなく、犁入れの時期には、領主のために耕作して種を準備しておさめなければならない。総合的にみると、非常に多種多様で重い負担が課されていた。

**3・2 双務的契約関係** **Q** 臣下は封土を与えられて誓約をおこなった主君に対し、6つの事柄(主君への妨害をおこなわないことなど)を守り、さらに支援をおこなわなければならない。一方で、主君も臣下と同じことを遵守する必要がある。守らなければならない誠実とされた。すなわち、主君と臣下のあいだの契約は双務的であった。

## p.88~89 イスラーム教の拡大 中央アジア・インド・東南アジア

**テーマの問い** 中央アジアではトルコ人のイスラームへの改宗が始まり、カラハン朝の時代にトルキスタンがイスラーム化した。インドにおいては、ガズナ朝の時代からイスラーム勢力が進出すると改宗が始まり、デリー=スルタン朝の頃には北インドでイスラーム化が進んだ。東南アジアにはムスリム商人の活動により、諸島部で改宗が進んだ。

## p.90~91 地域の視点 アフリカの歴史

**テーマの問い** 北アフリカとはサハラ砂漠で隔てられていたが、やがてサハラ縦断交易が活発化すると西アフリカではイスラーム化が進んだ。またインド洋を経由してアフリカ東岸にもイスラームが伝播し、スワヒリ文化が成立した。さらに大西洋を通じてヨーロッパやアメリカとも結びつき、大西洋三角貿易がおこなわれるようになった。

**3・4 マリ王マンサ=ムーサのメッカ巡礼** **Q** マンサ=ムーサの巡礼の様子を史料からみると、彼らは莫大な黄金を保有しており、それをカイロで宮廷や王室の人々に与えたり住民と売買したりしたために、金の価値を下落させてしまったと書かれている。すなわち、彼らの豊かさの源はマリ王国で産出する黄金であったと考えられ、その繁栄ぶりは素晴らしいものだったことがわかる。

## p.92~93 イスラーム諸王朝の発展

**テーマの問い** 東方イスラーム世界ではマムルークの登用が始まり、トルコ人やモンゴル人など騎馬遊牧民族の侵入と建国があいついだ。社会経済的にはイクター制が広くおこなわれ、イラン人が官僚として重用された。西方イスラーム世界ではベルベル人の建国が続き、社会経済的にはカイロでカーリーミー商人などが活躍した。

**2・3 イクター制** **Q** イクター制は、これまでの俸給(アター)を自力で支払うことができなくなったブワイフ朝が解決策として開始したことがわかる。ブワイフ朝の大アミールは、部下に対して、自分の所領などからイクターとして土地徴税権を分け与えた。その結果、中・南部イラクでは徴税官による税の徴収はおこなわれなくなってしまった。

## p.94~95 西ヨーロッパ世界の展開① 教会の権威、十字軍

**テーマの問い** 中世の西ヨーロッパでは、ローマ=カトリック教会が西ヨーロッパ世界全体に普遍的な権威をおよぼした。ローマ教皇を頂点としたピラミッド型の階層制組織がつくられ、大司教や修道院長は荘園をもつ大領主となった。末端の教区教会では司祭が農民の信仰生活を指導し、十分の一税を取り立て、独自の裁判権を有していた。

**2・2 グレゴリウス7世の改革** **Q** 当時のローマ=カトリック教会では聖職売買と聖職者の妻帯という問題が生じていたと考

えられる。そのため第4条では、聖職を売買あるいは違法な手段で授けた司教が職務を停止されると書かれている。また第12条では、聖職者の淫行を司教が懇願や金銭で認めたり罰しなかったりした場合はやはり職務停止になると書かれている。

**4 イェルサレムを征服した十字軍** **Q** 非常に残虐な行いを続けていたことがわかる。彼らはムスリムに対し、頭を切り落としたり、矢で射抜いたうえで塔から突き落とされたりした。ソロモンの神殿も血塗られ、市内も屍で満ち、血であふれる状態となった。そのため、ムスリムの一部は、身の安全の保証を求めたのちに城を明け渡した。

#### p.96 西ヨーロッパ世界の展開② 商業の発展

**テーマの問い** 農業生産が増大した結果、余剰生産物の交換が発達になり、都市と商業が発達し始めた。またムスリム商人やノルマン人の商業活動によって貨幣経済が大きく広がった。さらに十字軍により交通が発達すると、毛織物工業の発展を基礎に遠隔地貿易も発達した。その結果、地中海と北ヨーロッパから「商業の復活」と呼ばれる現象がおこった。

#### p.97 東ヨーロッパ世界の展開

**テーマの問い** ギリシア正教世界はビザンツ帝国で成立したが、やがて東スラヴ人・南スラヴ人・ブルガール人などをその世界に取り込んで拡大した。それらの国家ではギリシア正教会が伝播して国教化されるなどした。とくにロシア人が建てたモスクワ大公国はビザンツ帝国の後継者を自任し、ビザンツ帝国の滅亡後にツァーリの称号を用いた。

#### p.98~99 西ヨーロッパ世界の変容① 封建社会と教皇権の衰退

**テーマの問い** 商業の発展により貨幣経済が浸透するにつれて荘園にもつく経済体制は崩れはじめた。それに対して領主が封建反動をおこなうと農民反乱がおこり、封建社会は解体した。一方で中央集権的な政治権力の出現が求められ、国王権は強化された。こうしたなか、教会大分裂をおこしていた教皇権も衰退し、教会の墮落や腐敗を批判する人物も現れた。

**1・1 黒死病(ペスト)の流行** **Q** 黒死病(ペスト)は、ヨーロッパ全域に急速かつ広範囲に広まった。この病気を発症したものは左腕や鼠径部に腫れ物ができ、わずかな期間で死に至るため、大量の死者が出た。また黒死病の伝播速度は速く、通りや家で一度発生すると、病人を看病したり見舞いをしたりした人にすぐに感染した。

**1・2 ワット=タイラーの乱** **Q** この史料から、反乱の指導者となったジョン=ボールは、「アダムが耕しイヴが紡いだ時、ジェントルマンはいたのだろうか」となえ、すべての人間が平等であることを主張したことがわかる。そのため彼は農奴制を否定し、大貴族・法律家・裁判官などのジェントルマン階層の人々を排除して共和政を樹立することをめざした。

**3・2 ウィクリフ『世俗君主の鑑』** **Q** ウィクリフは、一般信徒は聖職者や説教師たちから得られる知識だけで十分だとする当時のローマ=カトリック教会の姿勢を批判し、聖書こそが一般信徒が拠りどころとするものであると主張している。そのため彼は、聖書が一般信徒にも理解できる言語で書かれていることが必要であると述べている。

#### p.100~101 西ヨーロッパ世界の変容② イギリス・フランス

**テーマの問い** 百年戦争やバラ戦争などの長期の戦争が続いた西ヨーロッパでは、軍事的な負担が重くなった諸侯や騎士が没落した。その一方で国王は、大商人などからの支援も得て統治制度を整えて中央集権化に成功した。そして彼らは常備軍などを設置するなどして王権を強化し、絶対王政への道を開

いた。

**3 大憲章(マグナ=カルタ)** **Q** 軍役免除金や御用金は国王独断では課すことができず、必ず身分制議会で協議をおこない、認められる必要がある。国王が捕虜になって身代金が必要になった場合、国王の長男が騎士叙任式をおこなう場合、長女が結婚する場合は例外となるが、正当な手段で御用金が課せられる。またこれは、王国内のロンドン市に御用金を課す時にも当てはまる。

#### p.102 西ヨーロッパ世界の変容③ スペイン・ドイツ・スイス・北欧

**テーマの問い** 国土回復運動(レコンキスタ)でイスラーム勢力と抗争していたスペインやポルトガルでは王権が強化され、積極的な海外進出がおこなわれた。一方、神聖ローマ帝国では大諸侯や自由都市の力が強く、政治的分裂が深まった。そして、大諸侯がおさめる領邦ごとに中央集権化が進み、身分制議會を開催して帝国から自立する動きをみせた。

**1 スペインのユダヤ教徒追放** **Q** イスラーム勢力とカトリック勢力が併存していた時代、イベリア半島ではユダヤ教徒の活動が認められていた。しかし国土回復運動(レコンキスタ)が終結し、イベリア半島がカトリック勢力で統一されると、ユダヤ教徒はキリスト教徒を墮落させる存在とみなされ、イベリア半島から永久に追放されることになった。

#### p.103 西ヨーロッパ世界の中世文化① 教会と修道院

**テーマの問い** 西ヨーロッパ世界ではローマ=カトリック教会が絶大な権威をもち、文化面でも大きな影響力を有していたため、文化はまず修道院で発生した。その後、修道院の附属施設として誕生し、やがて教授と学生が一種のギルドを組織して教皇や皇帝から自治権を与えられた大学が、文化発生の中心地となっていった。

#### p.104~105 西ヨーロッパ世界の中世文化② 学問・大学・美術・文学

**テーマの問い** 中世の西ヨーロッパにおいて、人々の日常生活全般でキリスト教の影響がいきわたっていた。たとえば、修道院において「祈り、働け」のモットーがとえられたことは、奴隷の仕事と考えられていた生産労働の見方を大きくかえた。また学問もキリスト教の影響下で神学が最高の学問とされ、哲学や自然科学はその下におかれた。

#### p.106~107 アジア諸地域の自立化と宋① 11~12世紀の東アジア

**テーマの問い** 宋はキタイ(遼)とは、北朝・南朝の皇帝同士という立場で親族関係を結んだ。西夏とは宋が君主、西夏が家臣の関係を結んだ。南宋は金と、金が君主、南宋が家臣の関係を結んだ。共通しているのは、宋から相手国に絹と銀を贈っていることである。全体としてみれば、華夷思想の枠に収まらない関係を結んでも、平和を維持しようとしたことがみて取れる。

**1 東アジアの様々な文字** **Q** 契丹文字、女真文字、チユノム(字喃)、ハングル、仮名文字、西夏文字

**3 遼淵の盟** **Q** 宋の君主は大宋皇帝、契丹の君主は大契丹皇帝と記されており、同じ称号が用いられている。そこから宋と契丹の対等な関係が読み取れる。さらに宋は契丹に大量の銀と絹を毎年贈ることも約束させられており、宋にとって屈辱的な条約であったと考えられる。

p.108~109 アジア諸地域の自立化と宋② 宋の政治と社会・経済・文化

**テーマの問い** 北方民族の圧迫からくる国防費の増大と歳幣・歳賜の支払い、そして文治主義による官僚制の肥大化による財政難が背景にあった。そのめざすものは、農民や中小工商业者の生活の安定と生産増加をはかりながら、同時に経費節約と歳入増加による国家財政の確立と軍事力の強化をめざす富国強兵であった。

**6-6 活版印刷** 活字を組み合わせて使う活版印刷は、字数の多い漢字には向かなかったため。

p.110~111 モンゴルの大帝国① モンゴル帝国の拡大

**テーマの問い** ユーラシア大陸全域をほぼ支配したモンゴル帝国によって、駅伝制(站赤(ジャムチ))がおかれ、東西の交通網が整備されて治安の安定と交通の利便性が確保されたため、陸上・海上交易が活発化し、東西の異なる文化の交流が盛んになった。

**2 ワールシュタットの戦い** 左側。右側の軍が馬上で槍を使っているのに対し、左側の軍は馬上から弓を射っている。左側の軍の戦い方は騎馬遊牧民のものである。

**3 交鈔** 銀である。交鈔は、もともと銀の補助通貨として使われた。

**5 駅伝制** 駅伝方式をとることで、飛脚人は1人当たり3マイルだけ走れば良く、準備時間や休憩時間を考えなくてよくなること。

**5 牌子(裏)に書かれた文字** パクバ文字。クビライに厚遇されたチベット仏教の高僧であるパクバが、クビライの命を受けて作成した文字。

p.112 モンゴルの大帝国② モンゴル帝国の解体、ティムール朝

**テーマの問い** 「14世紀の危機」といわれる時代で、疾病の流行、気候変動による天災がおこった。その結果、元は紅巾の乱などの反乱を受け、モンゴル高原へ退き、チャガタイ=ハン国、イル=ハン国とも分裂した。東西に分裂したチャガタイ=ハン国から頭角を現したティムールが、1370年にティムール朝を建国した。

**6 観星台** 太陽の影の長さをはかるためのもの。

**7 紅巾の乱** 「韓林兒…の祖先は…衆を惑わし」「妖言で鼓舞した」「愚民」拳兵を誅り」などの語句から、邪教に入信した愚民たちの反乱だとみなしている。

p.113 地域の視点 朝鮮半島の歴史① 三国時代~高麗

**テーマの問い** 朝鮮半島は、古い時代には中国王朝の直接支配下におかれることもあったが、しだいに独自の国家が発展した。三国時代における国家間の対立は、しばしば中国王朝の介入をまねいた。その後成立した統一国家の多くは中国王朝に朝貢し、冊封されることでみづからの王としての権威を保障されるとともに、多くの中国の文物が朝鮮半島に流入した。

p.114~115 明代の中国と隣接諸地域① 明初の政治と朝貢世界

**テーマの問い** 元がモンゴル人の支配のもと、積極的にユーラシア広域に渡る貿易をおこない、商人を重用したのに対して、明は漢民族による中華帝国をめざし、海禁政策をとり冊封・朝貢貿易体制を築き、農民支配を固めて財政の基盤を確立した。

**1 六諭** 農本主義的であることが大きな特徴である。里甲制・賦役黄冊・魚鱗因冊などを整備し、六諭にみられる民衆の教化に力を注いでいる点なども、農村の統治を基盤に王朝の基礎を確立しようとしたことがうかがえる。

**1 万里の長城** 明の物産を求めてのことであった。オイラ

トのエセン=ハンの侵入は明側が朝貢使節の人数制限と贈与品の大幅削減に対しておこなわれたものであった。モンゴルのアルタン=ハンも貿易を求めてしばしば明の辺境に侵入し、1550年には長城をこえて北京に至り、数日間に渡って包囲したため、北京政府は震撼した。1571年、明とモンゴルとの和議が成立し、明はアルタンを順義王に封じて国境沿いの大同などに互市(交易場)を開設した。

2-2 コロンブスの旗艦帆船サンタ=マリア号(右)と鄭和の旗艦

**宝船(左)の大きさ比較** 国威発揚と国営貿易(朝貢貿易)が主要な目的であると考えられる。しかし、永楽帝時代の積極的な対外政策とりわけ5度のモンゴル親征を考え合わせると、北方と南方の安定が最重要視されており、北京遷都を視野に防備が手薄になる中国東南沿海部とその延長上の海外諸国をも射程に入れた体制をめざしていたと思われる。使節の派遣が軍隊をともなう遠征の形をとったのも、武力行使も辞さない姿勢を示して、海洋の安定をはかるためである。永楽帝が構想する海禁=朝貢システムを含む世界秩序の確立に、鄭和の南海遠征は必要なことであった。**解説** コロンブスのサンタ=マリア号は全長25.7メートル、幅7.6メートル、約100トン、乗組員40人前後。鄭和の艦隊は乗員2万7800人、船の数62隻、最大の船は長さ約100メートル、幅約56メートルであったとも伝えられている。ただし鄭和の宝船については、15世紀初めにこのような巨大木造船が建造されたのかと議論され、否定的な意見もある。

**2-2 明に献上された麒麟** ソマリ語の「ギリン」とは、中国の伝説で太平の世が実現した時に現れる動物、「麒麟」と発音が似ているため、甥の建文帝から帝位を奪った(靖難の役)篡奪者であるという負い目をもっていた永楽帝は、儒教でもっとも理想とされる伝説の時が再現された証拠に違いないと、喜んだと推測できる。孟子の易姓革命の理論が影響し、中国の皇帝は篡奪を意識せざるをえない事情を有していた。**解説** 建文帝と永楽帝とのあいだの4年に渡る内乱は「靖難の役」ないし「靖難の変」と呼ばれる。武力衝突に着目すれば戦役、皇帝位の篡奪という事件性に着目すれば変事ともいえる。明代の史料では当然「靖難の役」が用いられ、公式的には永楽帝の即位は天命を奉じた正当な行為とされるが、清代になると乾隆帝ですら「靖難の変」と称している。伝説の聖獣「麒麟」は、王が仁のある政治をおこなうときに現れる神聖な生き物の1つとされている。魯の年代記「春秋」には魯の哀公14年に麒麟を得たという記事があり、これを「獲麟」という。

p.116~117 特集 銀による世界の結びつき

**テーマの問い** スペインやポルトガルの貿易船は、銀、キリスト教宣教師、火器の技術とともにアジアに來航し、新しい勢力の台頭をもたらした。一方ヨーロッパには、おもに中国の茶の文化、美術・工芸、思想が流入し、17世紀後半から18世紀には一種の中国趣味(シノワズリ)の流行がみられるようになった。

**1 中国の米価とイギリスの小麦価格、1600年前後の世界の銀の流通と東アジア** 北京の国庫から北方の軍事地帯に毎年運ばれていた銀と、アメリカ大陸や日本の銀が中国に流入する量がほぼ同程度であったことから、南から流入した銀が絶えず北方に吸い上げられていく構造があり、民間では銀不足の状況が続いていたと推測できる。しかし、北方に運ばれた銀の多くは、特権商人や官僚の手に入り、巨大な富を蓄積した彼らは都市に移り住んで、窮乏する農村とは対照的な贅沢な生活を送った。

**1 日本とフィリピンから中国へ流入した銀の推計** 17世紀、清朝がモンゴルを支配下に入れ、1644~45年に中国を占領し

たことにより、それまでの中国の北方戦線は消滅し、日本でもこの時期以降、徳川政権のもとで鎖国政策が進められ、国際交易に依存しない自立的な経済構造への転換がはかられていた。そのため、中国と日本はともに16世紀と比べて銀の需要が弱まっていたと考えられる。

**3 ブルー=オニオンの意匠** **Q** ザクロや桃の形が様式化したもの。**解説** ブルー=オニオンは実は「オニオン」ではなく、ザクロや桃であるという。ザクロは多産、桃は長寿・繁栄の象徴。中国のめでたい模様がヨーロッパに伝わり様式化し、玉葱形になったという。

p.118 明代の中国と隣接諸地域② 日本と東南アジア

**1・2 「南蛮屏風」** **Q** ポルトガル人によるアフリカ西岸探検は初めから黒人奴隷入手が目的の一つであった。ポルトガルが1455年にモロッコ沖のマデイラ諸島で始めた砂糖生産の中心は、16世紀にはブラジルに移り、いずれも労働力の主力は黒人奴隷であった。日本にやってきたポルトガル船に黒人水夫が乗っていたという記録は1546年にさかのぼる。その水夫も、信長の従者となり「彌助」と名づけられた黒人も、同じくモンゼンビークの出身者だという。

**2・1 16~17世紀の東南アジア** **Q** 明の海禁政策により、16世紀の東アジア海域では、日本を含む中国・朝鮮・琉球・ベトナムの人々が国の枠をこえて中継貿易をおこなっており、ヨーロッパ人もこの中継貿易に参入してきた。日本人の海外進出も豊臣政権期よりさかんて、東南アジアに渡航する商人たちが多かった。彼らはおもに東南アジアで中国船と出会貿易をおこない、また南洋貿易もさかんであった。17世紀、幕府が彼らに朱印状を与え海外渡航を許可し、朱印船貿易がさかになると、海外に移住する日本人も増え、南方の各地に自治制をした日本町がつくられた。なかにはアユタヤ日本町の長、山田長政のように、タイのアユタヤ朝王室に重く用いられる者もいた。朱印船の最重要輸入品は中国産生糸、最重要輸出品は銀であった。

p.119 地域の視点 朝鮮半島の歴史② 朝鮮王朝

**テーマの問い** 朝鮮王朝と日本は豊臣秀吉による朝鮮侵略時に関係が悪化したが、江戸幕府が成立すると修復し、朝鮮通信使が派遣されるようになった。近代に入ると明治政府は朝鮮王朝を日朝修好条規で開国させ、内政干渉を開始した。その後、日清戦争・日露戦争で日本が勝利すると植民地支配を本格化させ、韓国併合をおこなった。

p.120~121 ヨーロッパ世界の拡大

**テーマの問い** ヨーロッパではアメリカ大陸からの銀の流入もあり、物価が騰貴し(価格革命)、商業や貿易の中心が地中海から大西洋沿岸に移った(商業革命)。一方、アメリカ大陸はスペイン人らによって征服され、先住民の人口は激減し、根本的につくりかえられた。また、アメリカ大陸原産の作物がヨーロッパやアジアに広がっていた。

**3・1 価格革命 Q1** 17世紀は全体的に小麦価格が停滞している。ここから、気候不順や銀の供給の減少、戦乱などによる「17世紀の危機」の現象が読み取れる。

**3・1 価格革命 Q2** 地中海側の都市ウディネは高い位置から始まり17世紀に停滞するが、大西洋側の都市エクセタは低い位置から始まり17世紀に相対的な位置を上げ、18世紀には最高水準まで上がる。ヨーロッパ商業の成長の中心が地中海から大西洋に移った「商業革命」の現象が読み取れる。

**3・1 価格革命 Q3** 15世紀の価格差は6~8倍で、16世紀の急激なインフレーション(価格革命)にもかかわらず、1600年の価格差は約7倍でほぼ変わらない。しかし17世紀に最高価格

は少しずつ下がりはじめ、最低価格は上昇し、18世紀には価格差は急に収束し1750年の価格差は約2倍である。交通と商業の発達によって価格が平準化し、ヨーロッパ全域が実質的に1つの市場圏として機能しはじめたことが読み取れる。また、常にヨーロッパの最低水準であったワルシャワ(ポーランド)の価格が長期的には上昇していることから、ワルシャワなど東欧地域がヨーロッパの分業化により西欧への食料供給地となっていた状況が価格の平準化に作用していたことがうかがえる。

**4 ジャック・カルティエの『探検航海記』** **Q** コロンブスもカルティエもともに十字架を立てて領有宣言をしている。

**4・1 アタワルパの処刑** **Q** ヨーロッパ文明への懐疑が読み取れる。

**5 アメリカ大陸とヨーロッパの交流** **Q** 鉄器をもたず大型獣のいなかったアメリカ大陸の文明を、スペイン人の征服者たち(コンキスタドレス)は馬の機動力と銃で征服した。また彼らは、もちこんだサトウキビの生産に先住民を労働力として用いた。先住民のインディオの人口減少はこのような過酷な労働だけでなく、同時にヨーロッパからもちこまれた天然痘・インフルエンザなどの伝染病にも起因している。彼らは失われた労働力を補うためにアフリカから黒人奴隷を輸入するようになった。一方アメリカ大陸から流入した栽培植物は、ヨーロッパ人の食生活に変化をおこし、サツマイモ・トウモロコシ・トマト・ジャガイモ・トウガラシなどが食卓にのぼるようになった。とくにビタミンを多く含むトウガラシは安価で、貴重なスパイスの1つとなった。アメリカ大陸からのこれらの栽培植物は、ヨーロッパ人の植民活動とともに世界に広まり、とくに乾燥に強いトウモロコシやジャガイモは世界各地に広がり、世界の食生活を変化させた。また梅毒はアメリカの風土病といわれ、コロンブスによってヨーロッパにもたらされ、その後、世界に広がったといわれている。

p.122~123 トルコ・イラン世界の展開

**テーマの問い** スナナ派イスラーム教の盟主であるだけでなく、デヴシルメ制でヨーロッパのキリスト教徒の子弟によるイエニチェリを編制するなど、多民族国家として多様な民族を登用し、ミット制により多文化・多宗教の共存を認め、経済的にも繁栄した。

**1 コンスタンティノープルの陥落** **Q** コンスタンティノープルは難攻不落の都として知られ、城壁と金角湾をふさぐ鉄鎖によって守られていた。メフメト2世は陸に続く西側の城壁を攻撃したが十分に崩すことができず、そこで敵の心臓部である金角湾に艦隊を入れるために、金角湾の北側の陸地に樹脂を塗った板で道をつくり、それを使って艦隊に山を登らせ、70隻もの船を金角湾に移す作戦に出たのであった。



▲オスマン帝国のコンスタンティノープル攻略

**1・2 17世紀のイスタンブルQ1** イスラーム寺院であるモスクのみならず、様々な宗派のキリスト教教会、ユダヤ教のシナゴークなどが多数分布していることから、イスタンブルは多民族・多宗教集団が居住するコスモポリタンな都市であったことがうかがえる。それは、オスマン帝国のミレット制にみられる寛容な宗教政策・民族政策が背景にあったと推測され、イスタンブルのこのような様相はオスマン帝国の性格を表すものとみることができる。

**1・2 17世紀のイスタンブルQ2** 15世紀末のスペイン・ポルトガルによるユダヤ人追放、1536年のポルトガルの異端審問制度の導入を機に、15世紀末～16世紀のイスタンブルには多数のユダヤ人とコンベルソ(キリスト教に改宗したユダヤ人)が流入した。当時のオスマン帝国の経済的繁栄と寛容な経済政策が誘因となり、イスタンブルのユダヤ人は1535年には4万人をこえ、世界最大のユダヤ人居住都市となった。

**3 『アッパース大帝年代記』Q** アッパース1世が即位したとき、サファヴィー朝は西のオスマン帝国、北のウズベク族が攻勢をかけてきたため危機に瀕していた。アッパース1世は王の常備軍として、それまでのトルコ系遊牧民兵に頼らずに、定住民による銃兵と砲兵を中心にすえる新軍を組織し、ウズベク族を征討、オスマン帝国よりアゼルバイジャン・イラクを奪回、イギリスと結んでポルトガル人をホルムズ島から駆逐した。

#### p.124～125 特集 近世イスラームの大都市

**テーマの問い** それぞれの地域の文化とイスラーム文化が融合した高度なイスラーム建築が現存し、現在もそれらに隣接した広場、バザール、商店街などに人々の賑わいがみられる。

#### p.126～127 ムガル帝国の興隆

**テーマの問い** ムガル帝国は、アクバル帝が人頭税(ジズヤ)を廃止するなど、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の融和をはかる政策によって繁栄していった。しかしアウラングゼーブ帝が再び人頭税を復活させるなどスンナ派イスラーム教の政治がおこなわれるようになると、ヒンドゥー勢力の反発・離反をまねき、衰退のきざしが表れるようになった。

**1 南インドのヴィジャヤナガル王国Q** **解説** それまで王国はインド洋交易によってアラブ商人から軍馬を手に入れていたが、ポルトガル商人がゴアに商館を設けると、彼らから手に入れるようになった。ポルトガル商人はホルムズから軍馬を運び、王国に供給した。

**2 ムガル帝国誌Q** ムガル帝国の支配層はトルコ系のイスラーム教徒であったため、インドのヒンドゥー君主たちをいかに統御するかが大きな課題であった。アクバルは先行するイスラーム諸王朝の試行錯誤の歴史から、人頭税(ジズヤ)の廃止にみられるヒンドゥーとの共存を統治の方針とした。一方アウラングゼーブは、デカン進出で深刻な政治的危機に直面し、人頭税を復活した。これはこの危機を乗り越えるためにムスリム正統派(スンナ派)の熱狂的な支持をねらったものとみられる。

**3 ブランコに乗る女性、ゴーヴァルダン山を支えているクリシュナQ** ムガル絵画では、そこに描かれた人物はベルシア風の様式化した静かな人物の動きから脱し、動的で活力があるものとなっている。とりわけ皇女や宮廷の女性を描いたことが最大の特徴である。一方ヒンドゥー王侯の保護のもと、ムガル絵画の影響を受けて発達したラージプート絵画は、平面的・形式的特色をもち、ヴィシュヌ神の化身クリシュナとラーダー姫との愛情物語をテーマとした絵が多い。

#### p.128～129 清代の中国と隣接諸地域

**テーマの問い** 清朝は、漢民族を威圧策と懐柔策を用いて巧みに統治した。また、版図を直轄領と間接的に統治する藩部にかけて統治し、周辺諸国とは形式的な君臣関係を結び属国(朝貢国)とし、軍事力を背景に国際秩序を築いた。

**1・1 清の宝璽Q** ハンが皇帝を兼ねていることを意味している。**解説** ホンタイジが満洲・モンゴル・漢族に君臨する大清皇帝位についたことで、旗人社会のハンが中国的な皇帝、つまり諸王の上に立つ存在であることが示され、順治帝が北京に入城・遷都することで文字通りハン(大清皇帝)が中国皇帝を兼ねることになった。

**1・1 太子密建と手文庫Q** 皇帝が交替するときに混乱が生じやすいため。**解説** 後継者指名の新しい方法は「太子密建」と呼ばれ、第5代皇帝の雍正帝が定めたものである。満洲族のリーダーは嫡長子の系譜に自動的に引き継がれることはなく、各八旗のリーダーなどの有力者が合議し、皇族のなかから有能と思われる人物を選んだ。しかし、皇帝が交替するときに混乱が生じやすいため、雍正帝は新しい次の皇帝となる皇太子の名を公表せず、紫禁城にある乾清宮の玉座の上に掲げてある「正大光明」と書かれた扁額の中におくことを宣言した。皇帝は公開されない後継者を何度も変更することができ、皇帝崩御の際に衆人のもとで開かれて、後継者が決定した。この方式は、有能な人材をリーダーとする満洲族の指導者選出の原則のなかに、後継者をあらかじめ決定しておくという漢族の方法を取り込んだものである。

**1・2 清の政治の仕組みQ** 軍機処は雍正帝の時代、ジュンガル征討に際し、用兵の迅速と機密保持の目的で内閣の分局として臨時に設けられた。戦時の臨時組織であったことから、わずか20名程度の官僚が重要事項をスピーディーに決定・実行する組織であった。のち常設され皇帝の諮問機関として、内閣の権限をも奪って一般政務をも審議、国家の最高政治機関となった。清朝の軍国主義的な性格をみることができる。

**2 曼荼羅に文殊菩薩として描かれた乾隆帝Q** 乾隆帝の右肩に描かれた剣、左肩の経巻は文殊菩薩の持ち物である。チベット仏教を信仰した女真人は文殊菩薩の名にちなんで民族名をマンジュ(満洲)と改めた。清朝の皇帝は、中国の皇帝で、満洲族のリーダー、遊牧民族のハーン、チベット仏教の大施主を兼ねる四面体であった。この曼荼羅は清朝がユーラシアの帝国であったことを思わせる。**解説** 清朝は康熙帝以来、ジュンガルとチベット仏教の施主を争いチベットを保護下においた。乾隆帝はジュンガル勢力下にあった東トルキスタンを制圧し、清朝の最大版図を実現した。この曼陀羅からは、チベット仏教徒であるモンゴル人とチベット人の支持を得るために、清朝がチベット仏教を厚く保護したことがうかがえる。

**3・1 江戸時代の対外交渉4ルートQ** 日本は清朝と正式の国交をもたなかったが、長崎の唐人屋敷で中国人商人の交易を許すほか、オランダ・琉球・朝鮮を通じて交易をおこなった。

#### p.130～131 特集 明清時代の社会と文化

**テーマの問い** 16世紀以降、ヨーロッパとの貿易などによりメキシコ銀・日本銀が流入し、税の銀納化が進み、明末には一条鞭法が実施された。さらに清代に入り18世紀には人口が急増、トウモロコシ・サツマイモなどの新作物がそれを支えた。18世紀初めに清は地丁銀制を導入し、税制から人頭税が消滅した。

**2 徐光啓『農政全書』Q** 長江下流域の蘇州・湖州(江浙地方)にかわって、中流域の湖広地方が一大穀倉地帯となり、「湖広熟すれば天下足る」といわれるようになった。

**3・3 中国の推定人口の推移Q** 人口増加にはいくつかの複合的な要因が考えられる。明末清初の混乱がおさまり康熙・雍

正・乾隆という清朝の盛期であり、18世紀には華中・華南地域の山地の開発が進んで、煙草・藍・木材・茶などの商品作物の栽培や加工業が多くの人口を吸収した。同時に自給作物として栽培されたトウモロコシ・サツマイモなどのアメリカ大陸原産の新作物がその人口を養った。また18世紀半ばから広州にイギリス船が銀をもちこむと銀価格が下落、それと人口増加による穀物需要の増大が重なり物価が高騰したことも農村の活況を加速した。

**4 清代の洋風の連環** **Q** ヨーロッパ人の来航にともない、清代には明以来の赤絵・染付のほかに、おもに輸出用として西洋人好みの磁器(洋彩)がつくられた。

### p.132~133 地域の視点 東南アジアの歴史

**テーマの問い** 東南アジアは、おもに交易活動を通じて南アジア世界と東アジア世界の影響を深く受けた。その結果、ベトナム北部は東アジア文化圏に取り込まれた。一方、その他の地域はとくに宗教面で南アジア世界の影響を受け、仏教とヒンドゥー教を受容した。やがてムスリム商人が進出してくると、諸島部ではイスラーム教も流行するようになった。

**4 シュリーヴィジャヤ王国と仏教** **Q** 東南アジアの諸島部では前近代の早い段階で大乘仏教が流行し、シュリーヴィジャヤ王国には中国僧の義浄が来訪した。一方、大陸部ではスリランカ経由で上座部仏教が受容され、ミャンマーのパガン朝以降、またタイのアユタヤ朝以降の王朝では、とくに多くの仏教寺院が建立された。

### p.134~135 ルネサンス①

**4・3 天国へ導かれるダンテ** **Q** カトリック的思想体系にもとづきながら古典古代やイスラーム教徒にも評価を与えている点、美しい自然描写、ラテン語ではなくイタリアのトスカナ方言で書かれていることなどにルネサンスの先駆者としての特色がみられる。

**4・3 ペトラルカの手紙** **Q** ペトラルカの手紙の相手キケロとは、古代ローマの政治家であり雄弁家として知られるマルクス=トゥリウス=キケロである。ペトラルカは古代ローマの古典研究の第一人者であった。彼の古典研究は、過去の死せる人たちの生き生きとした対話であったことがこの手紙からうかがえる。彼はキケロを、弁論家・道徳哲学者としての権威から解放し、紀元前1世紀のローマ社会を生きた具体的人間としてよみがえらせたのである。

### p.136~137 ルネサンス②

**3 ミラノ公への手紙** **Q** これは戦乱状態にあるイタリアにあって、ミラノ公に宛てたレオナルド自身による推薦状である。携帯橋梁や戦車などの軍事技術売り込む一方、最後に、平和な時代には建築、彫刻、絵もやりますと述べている。レオナルドが科学者であり、技術者・建築家・芸術家とあらゆる活動をおこなう、まさに万能人であったことがうかがえる。

### p.138~139 ルネサンス③

**1・2 『カンタベリ物語』** **Q** イタリアのフィレンツェ出身の人文学者ボッカチオが14世紀の中頃に著わした短編小説集で、最初の近代小説といわれる。当時大流行したベストから逃れるため、フィレンツェ郊外の教会にたまたま落ち合った男女10人が退屈しのぎに話をするという設定で、10日間で100の物語が語られる。登場人物の赤裸々な打ち明け話には、ユーモアや風刺、恋愛などの人間くさい描写があり、ダンテの『神曲』に対して『人曲』とも呼ばれる。

**1・2 エラスムス『愚神礼讃』** **Q** 民衆の教化や伝道を指している。

**2 ガリレイの『二大世界体系対話』(『天文対話』)の扉絵** **Q** ガリレイの時代はカトリックとプロテスタントが激しくせめぎあう宗教改革の時代であり、『二大世界体系対話』が禁書となった1630年代にはドイツ三十年戦争が戦われていた。ローマ=カトリック教会はみずからの教義や権威に反対するものに敏感になり、当時教会内ではイエズス会が『天文対話』はプロテスタントに手を貸していると主張した。また、活版印刷による本の普及で地動説が広まっていたことも背景の1つである。

**2・1 初期の印刷所** **Q** ラテン語で発表された『九十五カ条の論題』は、ただちにドイツ語に翻訳されて大量に印刷され、ドイツ中に大反響を巻き起こした。ドイツでは1520~40年の20年間に、前の20年間の3倍の本が出版された。なかでも『キリスト者の自由』『教会のパピロニア捕囚』などルターの著作は1518~25年に出版されたドイツ語出版物の3分の1以上を占め、彼のドイツ語訳聖書は1546年までに430版を数えた。

### p.140~141 宗教改革

**テーマの問い** 宗教改革はカトリック教会の影響下から自立した国家や各階層を突き動かし、ヨーロッパ各地で宗教対立・宗教戦争を引き起こすに至った。それらはヨーロッパ諸国の権力闘争に発展し、その過程において諸国の主権国家化がうながされていった。

**3 マックス=ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』** **Q** カトリックの職業に関する倫理を指しており、従来カトリックでは職業労働は重要視されておらず、富の追求は信仰の妨げとなるとして清貧が尊ばれていた。

**2 『九十五カ条の論題』** **Q** 罪のつぐないは信徒の全生活をかけておこなうものであり、善行つまり教会への寄進によって許されるものではない、としている。ルターの批判は、おもに教会(サン=ピエトロ大聖堂)建設のための贖宥状の販売に対して宗教上の疑問を感じてのことであり、この時点ではカトリック教会や教皇権を否定していない。

**5 イグナティウス=ロヨラ** **Q** イエズス会は、スペイン語で「イエスの軍隊」の意で、カトリック改革の尖兵として1540年に教皇パウルス3世によって公認された。布教については教皇への絶対服従を誓った。その組織を運営するため軍隊的な規律と、司祭になるための長期に渡る修練とが要求された。南ドイツのカトリックを回復し、アジア・ラテンアメリカへ宣教師を派遣した。

### p.142 イタリア戦争と主権国家体制

**テーマの問い** ヨーロッパではイタリア戦争をきっかけに、一国の強大化を防ぐ勢力均衡の考えが誕生し、国家相互の同盟関係の形成が開始された。同時に、イタリア戦争、それに続く宗教戦争など、戦争状態の長期化と軍事技術の進歩(軍事革命)にともない、国内の統一的支配を強める必要が生まれ、国王による国家統合が進んだ。こうして一定の領域で主権をもつ国家が生まれ、主権国家の形成期には絶対王政と呼ばれる国王による強力な統治体制が生まれた。

**2 マキアヴェリ『君主論』** **Q** イタリアは中世以来、小国に分裂した状態が続いており、この時代はイタリア戦争(1494~1559)中で、フランス・神聖ローマ皇帝・スペインなどがヨーロッパの覇権をめぐる争っていた。そのような大国に翻弄されるイタリアの現実をふまえて、マキアヴェリは『君主論』を著し、君主権の強化とその方法を論じた。当時の分裂したイタリア内では勢力均衡の立場で同盟外交が展開され、たがいに外交官を常駐させ、小さな「国際社会」が成立していた。これはのちの主権国家体制の先駆けであり、マキアヴェリは政治を宗教・道徳から切り離したことで近代政治学の祖

と評価されている。

### p.143 スペインの全盛期とオランダの独立

**テーマの問い** オランダは造船業の発展によりヨーロッパの海運を圧倒的に支配し、中継貿易で繁栄した。17世紀に入るとアジアに進出しポルトガルにかわって香辛料貿易を独占、鎖国体制の日本とも貿易を許され、アジア内貿易に参入した。また北米大陸にも進出し、首都アムステルダムは世界商業・金融の中心地として繁栄した。

**2 フェリペ2世** ラテンアメリカからもたらされた銀は広範な国民を豊かにすることなく宮廷の維持と戦争に費やされ、スペインは深刻な財政難におちいっていった。そのため農民や手工業者に重税をかけざるをえず、底辺の広い層の経済的活力を奪った。またイスラーム時代の灌漑施設を維持できず、羊毛生産を重要視して放牧特権を大切にすることも、農地を不毛にし農耕を荒廃させた。一方ユダヤ人を追放したため都市経済も破壊し、スペイン王室の財宝と呼ばれたネーデルラントの離反も大きな痛手となった。こうしてイギリス・オランダなどの新興国の攻撃・発展により、その地位を低下させていった。

**3 17世紀のアムステルダム** 16世紀後半に始まるオランダ独立戦争で、ネーデルラント南部のアントウェルペンはスペイン軍に破壊され、世界経済の中心は北部のアムステルダムに移っていった。スペインからの独立を宣言したオランダ(北部ネーデルラント)は、東インド会社・西インド会社を設立し世界規模の貿易に取り組み、17世紀前半、首都アムステルダムには新大陸の銀・アジアの香辛料・ヨーロッパ各地の物産が集められた。また1609年にヴェネツィアにならって振替銀行のアムステルダム為替銀行が設立され、あらゆる貨幣を預金として受け入れ、アムステルダムはヨーロッパ金融取引の中心となった。ヨーロッパ各地の貿易業者の取引が、同銀行の帳簿上で処理された。

### p.144~145 イギリス革命と議会政治の確立

**テーマの問い** 絶対王政を排除し、「国王は君臨すれども統治せず」と表されるように、議会主権の立憲政治が確立していった。

**3・1 東インド会社設立の請願** 資本を統合してインドとの取引を独占的におこなう特権会社を設立すること。(初めの6回は)関税を免除すること。

**5 チャールズ1世の処刑** 航海法の制定はその後200年の貿易政策の基本となった。さらにカリブ海のスペイン領ジャマイカの獲得など、オランダやスペインに対抗して海外市場を拡大し原料・食料地を獲得、のちの商業革命や植民地帝国建設に貢献した。また、1654~59年にはイングランド・スコットランド・アイルランド・ウェールズの4国民を統治するという複合国家体制が現れ、これ以後の出发点として重要な転機となった。しかし共和政府の支持基盤は弱く不安定で、クロムウェルは武力で議会を解散し護国卿に就任すると軍事独裁的な性格を強めていった。また、ピューリタニズムにもとづく厳格な統治は、劇場の閉鎖をはじめ娯楽を取り締まり、クリスマスまで禁止されるなど国民の不評を買っていた。度重なる混乱のなかで、国民には王政への復帰を望む気持ちが高まっていた。

**5 権利の章典** 1では立法権、4では徴税権、6では徴兵権を、議会のものとする主旨が読み取れる。議会在主権を握り、徴税権・徴兵権を議会法をもって執行できることで、イギリスの戦争遂行能力は高まっていったものと考えられる。

### p.146~147 フランスの宗教内乱とルイ14世の時代

**テーマの問い** ルイ14世は自身を神格化し、ヴェルサイユ宮殿を拠点に貴族を従属化した。また、財務総監の Colbert のもとと重商主義政策をおし進め王権を強化、「自然国境説」を主張して侵略戦争をおこし、領土拡大を強行した。

**2 アンリ4世の改宗** ユグノー戦争中、ヴァロワ家の断絶によりブルボン家から即位したアンリ4世は、国内少数派であるユグノーの首領であった。そのためカトリック勢力による根強い抵抗にあった。彼は国民を納得させ、広く国王として認知されるためにカトリックに改宗し、ローマ教皇による破門解除の後、翌年シャルトルで成聖式をおこなった。宗教対立による内戦を終結させ事態を収拾するために、自身の改宗という柔軟で現実的な解決をはかるうとしたのである。

**2 ナントの王令** 王国内の都市における信仰の容認、承認された場所での礼拝、礼拝の許されている都市における書籍の印刷・販売。**解説** このように、王令ではあくまでカトリック教徒が有利で、ユグノーらは条件つきで信仰を認められたにすぎないことがわかる。王令は、国王の改宗により不信感をつのらせていたプロテスタント教徒への対策でもあった。

**3 (ルイ14世の侵略戦争)** オランダ

**3 ボシュエ「聖書の言葉による政治論」** ルイ14世時代のフランス国家は「絶対王政」の典型とみなされている。近世のヨーロッパでは、国家は領域内の住民を直接につかむ(たとえば課税)のだけでなく、国家と住民とのあいだに教会・都市・貴族身分などの中間団体が介されることではじめて統一できた。ルイ14世の統治の特徴は、その社会集団の伝統的権利を否定・制限したことにある。したがって、強い官僚機構と王権の神聖化は大きな緊張関係をはらんでいた。ルイ14世が大貴族の勢力を封じて飼いならすために用いたのが、ヴェルサイユ宮殿であった。

### p.148~149 17世紀の危機と三十年戦争

**テーマの問い** 神聖ローマ帝国内でのプロテスタント・カトリック両派諸侯間の宗教対立から戦いが始まったが、やがてプロテスタント国デンマーク・スウェーデンがプロテスタント側援助を名目に参戦して国際戦争に拡大した。しかし最後の段階で、カトリック国フランス(王位はブルボン家)がカトリック側の中心である神聖ローマ帝国(皇帝位はハプスブルク家)打倒のためにプロテスタント側に立って参戦したため、戦争の宗教的性格が薄れ、国家間の勢力争いの性格が前面に出てきた。講和会議は総勢150名の代表が集まり、初めての国際会議といわれ、オスマン帝国も使節を送り、ローマ教皇の使節も一代表として参加した。また、この会議で締結されたウェストファリア条約で帝国内の領邦にはほぼ完全な主権が認められ、神聖ローマ帝国は有名無実化した。こうして中世以来ヨーロッパの秩序を支えてきたローマ教皇と神聖ローマ帝国の権威は完全に衰え、かわって主権国家による国際関係が成立した。

**2・2 ウェストファリア条約の調印** 講和会議は総勢150名の代表が集まりイギリス以外ヨーロッパの列強がほとんど参加したこと、オスマン帝国も使節を送りローマ教皇の使節も一代表として参加するなど、政体や宗派、規模にかかわらず、参加国に対等の資格が認められたこと、以上のことからヨーロッパ国際社会の成立を告げる会議と評されている。

**2・2 ウェストファリア条約** 神聖ローマ帝国の事実上の解体。

### p.150 プロイセンとオーストリア

**テーマの問い** プロイセンがヨーロッパの強国の地位につくことになり、オーストリアのハプスブルク家が長年敵対してきた

フランスと同盟を結ぶ(外交革命)など、ヨーロッパの国際関係に大きな変化が生じた。また、両戦争に介入し敵対して戦ったイギリスとフランスは、並行して北米大陸・インドでも植民地戦争を戦い、七年戦争の終結とともにイギリスが勝利した。

**3・1 フリードリヒ2世「反マキアヴェリ論」** 人民の幸福を第一に考える、としている点に啓蒙思想の影響がみられるが、一方で、君主の絶対権力を正当化している。

#### p.151 北方戦争とロシア

**テーマの問い** ピョートル1世率いるロシアがカール12世のスウェーデンに挑んだ北方戦争(1700~21年)の本質は、バルト海の覇権をめぐる重商主義戦争であった。この戦争での勝利は、ロシアの大国化の契機となった。

**2 ペテルブルク建設を視察するピョートル1世** ペテルブルクはロシアにとって「西欧への窓」となり、西ヨーロッパの文物が流入する拠点となり、ロシアの近代化を進めることになった。

**3 カール12世の葬送** 「バルト帝国」スウェーデンは、北方戦争中のカール12世の戦死後、絶対王政が維持できなくなり、1719~20年に制定された憲法(新政体法)では王権が徹底的に制限された。貴族部会中心の議会によって任免される王国参事会が行政権を握り、国王もその一員にすぎなくなった。1721年のニスタット条約によりロシアと講和したが、バルト海対岸のスウェーデン領の多くを失い、「バルト帝国」は実質的に崩壊した。かわりにバルト海周辺に勢力をのばしてきたのはプロイセン、とくにロシアであった。

#### p.152~153 地域の視点 ポーランドの歴史

**テーマの問い** ポーランドの国境線は、列強諸国との関係でしばしば変更された。ヤゲウォ朝までは国境線を拡大したが、選挙王政にともなう混乱で弱体化するとプロイセン・オーストリア・ロシアに分割され、一時国家が消滅した。ナポレオン時代以降に国家は復活したが、ワルシャワ大公国はフランス、ポーランド立憲王国はロシアの影響下におかれた。

#### p.154~155 地域の視点 イベリア半島の歴史

**テーマの問い** 古代にはローマ帝国の領域内で、中世にはゲルマン人の進出を受けた後にイスラームのウマイヤ朝の勢力下に入り、さらに最終的には国土回復運動(レコンキスタ)でカトリック勢力に支配されたイベリア半島には融合文化が発展した。また、宗教的に交じり合うなかで、ユダヤ人などのマイノリティも活躍した。

#### p.156~157 重商主義、ヨーロッパ諸国の海外進出

**テーマの問い** インド航路を開拓したポルトガルは16世紀前半、ヨーロッパの香辛料貿易を独占して繁栄し、16世紀後半になると、アメリカ大陸に植民し銀をヨーロッパに輸出したスペインが台頭した。17世紀に入ると海運業が発展したオランダがヨーロッパの中継貿易で繁栄し、イギリスとフランスの両国はともに重商主義政策をとってオランダの商業覇権に対抗した。17世紀末から18世紀中頃にかけて、イギリスとフランスは海外でも勢力争いを繰り返して、ヨーロッパでの戦争と並行してインド・北米大陸で激しく争った。そして七年戦争の終結(1763年)とともに、イギリスがこの植民地獲得競争に勝利した。

**1 航海法** オランダの中継貿易に打撃を与えイギリスの海運業の伸長をはかることになった。両国の関係は悪化し、翌年の1652年、第1次英蘭戦争が勃発した。

**3 1763年の世界** イギリスがフランスとの植民地戦争に勝

利した年。1763年のパリ条約の締結によりフランスは北米大陸の植民地を失い、イギリスはカナダ・ミシシッピ川以東のルイジアナ・フロリダを獲得、インドにおいてもイギリスはフランスの勢力を駆逐した。

**4・1 イギリスとフランスの直接税・間接税比率** イギリスの税制は間接税が中心であるのに対して、フランスの税制はイギリスに比べて直接税の割合が大きいことがわかる。

**4・2 イギリスの種類別税収額** 間接税の消費税。イギリスの消費税は主としてビール、石炭、石鹸、皮革、ガラスなどの奢侈品にかけられた。収入が増えると奢侈品をより多く買う傾向があるため、経済成長率以上のスピードで、税収がのびた。そのため戦費の調達のために借金をしても返済がしやすかった。対して土地税を基盤にしていたフランスは、経済成長があっても税収がのびず借金が返済できなかった。イギリスは地主勢力が強いので土地税を上げることができなかったため、間接税とりわけ消費税を税収源とする必要があったのである。

#### p.158~159 特集 砂糖からみた世界史

**テーマの問い** 砂糖は食生活をうるおし、貿易を活発化させてきた一方で、奴隷問題やカリブ海域の経済が砂糖に依存する問題などを生じさせた。

**3 砂糖の効能** 眼病や呼吸器疾患に効く薬と考えられていた。

**5・3 イギリスの輸入品と輸入元の変化** 3.8倍(4倍近く)

**5・3 イギリスの輸入品と輸入元の変化** 茶、穀物

**5・3 イギリスの輸入品と輸入元の変化** 新世界およびアジアがおもな相手となった。

#### p.160~161 17~18世紀ヨーロッパの文化と社会①

**テーマの問い** 17世紀の「科学革命」の時代は近代科学の基礎を築き、産業革命期の技術革新を準備し、18世紀に芽生えた新しい社会思想は啓蒙の時代を準備し、18世紀後半から始まる市民革命・近代市民社会の形成に影響を与えた。

**4 アダム・スミス『諸国民の富』** 国民の労働

**4 アダム・スミス『諸国民の富』** 人間が自分の利益を追求することで、社会の利益を増進させる。

**4 アダム・スミス『諸国民の富』** 重商主義

**5 ポンパドゥール夫人** 啓蒙思想にもとづく百科事典で、科学・技術や哲学・思想・宗教などを紹介した。フランスの人文主義者ディドロと数学者ダランベールがおもに編集し、1751~72年にかけて刊行された。執筆にはヴォルテール、ルソー、モンテスキューなども名を連ね、執筆・刊行に協力したフランスの啓蒙思想家たちは「百科全書派」と呼ばれる。ポンパドゥール夫人の肖像画に書き込まれるということは、夫人が百科全書の出版を公に保護していたことがうかがえる。

#### p.164~165 産業革命① 農業・技術革命、社会問題

**テーマの問い** イギリス産業革命は綿工業から始まり、関連産業である鉄鋼業や石炭業、物資運搬のための交通網や交通手段の発展をもたらした。資本主義の経済体制を確立させた。その一方で子どもを含めた労働問題や公害などの問題も発生した。また、「世界の工場」イギリスを中心とする国際分業体制を確立させた。

**1 「Capital and Labor (資本家と労働者)」** 社会の変容：資本家と労働者という階級が出現し、また工業中心の社会となり、工業やサービス業に産業の中心が移動した。  
A：炭鉱で児童労働がおこなわれているところ。

**4・1 大西洋三角貿易** 奴隷貿易を含む大西洋三角貿易は、イギリスに富の蓄積をもたらした。この貿易が続くことによ

り、多くの人々が奴隷とされたアフリカは、長期的かつ膨大な損害をこうむることとなり、またアメリカ大陸はモノカルチャー経済へとおちいり、奴隷問題が残存した。

**4・1 キャラコ熱** 危険視した人々：毛織物業に従事している人々。

手段：原料の綿花を輸入してイギリス国内で綿織物を生産する輸入代替工業化の手段を取ることが考えられる。

**7 児童労働** 背景：糸つなぎの作業は、指先の柔軟さを必要としているため、男性よりも女性や子どもの方が適切であることや、賃金が男性より安いため。

対策：児童労働に対しては、1833年の工場法により、年齢・勤務時間などの規制をおこなった。

**8 夏目漱石の日記(1901年1月)** イギリスの問題：都市への人口集中によりスラムが形成され、水・大気・衛生などが劣悪な生活環境のもとに労働者がおかれたり、大気汚染や水質汚濁などの公害を抱えた。

日本の類似例：明治時代に生じた足尾銅山の廃液による公害や、四大公害病の原因となった公害など。

## P.166 産業革命② 世界経済

**テーマの問い** 「世界の工場」となったイギリスは、世界に綿織物市場(インド、中南米諸国、イランやオスマン帝国、エジプト)を広げ、また茶を輸入していた中国に対しても自由貿易を要求し、アヘン戦争を引きおこした。これらの地域は、イギリスに農産物や食料、原料などを供給する地域となり、イギリスを中心に経済が再編成され、世界の一体化が進んだ。

**1・1 家計簿にみるイギリスと世界の結びつき** 輸入：茶は中国産などと想定され、砂糖は西インド諸島などからのものと想定される。

A家族とB家族：AとBの家計簿を比較すると、エンゲル係数や食費の品目数、衣料や石鹸・石炭などにかけた金額から、明るさやあたたかさ、衣服などの清潔さまで生活レベルに相当な違いがあったと考えられる。

イギリス社会：紅茶や砂糖といった輸入品が共通してみられる点から、イギリスの食卓を輸入品が支えており、イギリスが貿易で世界と広くつながっている社会であったことがわかる。

**1・3 イギリスで消費された綿花の生産地別の比率と消費量の総量** アメリカ合衆国・西インド諸島：原綿(綿花)をイギリスに供給する原料供給地としてイギリスの産業を支える存在。アメリカ合衆国の綿花：南部地域で、黒人奴隷を労働力とするプランテーションで栽培・生産されていた。

**1 ウェイクフィールドの「自由貿易帝国主義」** イギリスにとって、綿織物というイギリス製品の魅力的な市場とみなされており、その市場を得るために1840年にアヘン戦争という手段をとった。

## p.167 特集 環大西洋革命と近代世界システム

**テーマの問い** 18世紀後半から19世紀前半に大西洋をまたぐ地域で生じた、イギリス産業革命、アメリカ独立革命、フランス革命、中南米諸国の独立を指す。ラ=ファイエットやジェファソンなどのようにアメリカ独立革命・フランス革命双方にかかわるものや、ナポレオン期のヨーロッパに滞在したボリバルなど、人的な交流にともなう思想や理念の伝播があり、それぞれの革命が連鎖反動的に生じていた。

## p.168~169 アメリカ合衆国の独立と発展

**テーマの問い** 独立戦争当初は植民地内部でも独立支持者は3分の1程度であったが、『コモン=センス』が世論を独立指示に導いた。こうした状況を受けて、植民地側は、独立宣言を

発し、1877年にはアメリカ合衆国と名乗った。戦闘では、サラトガの戦いで勝利以降、フランス・スペイン・オランダがアメリカ合衆国側について参戦し、ロシア提唱の武装中立同盟もあって、イギリスは国際的に孤立した。1781年のヨークタウンの戦いでアメリカ・フランス連合軍が勝利し、イギリスは1783年のパリ条約でアメリカ合衆国の独立を承認した。

**3 印紙法会議の宣言、宣言法** 印紙法：「代表なくして課税なし」(13植民地の代表者がいない本国議会には、13植民地に課税する権限はないとの主張)。

宣言法でのイギリス本国の回答：植民地はイギリス国王及び本国議会に従属し、その決定に従うべきであり、本国議会は植民地に対する法を制定する完全な権限を有している。

**3 コネティカット植民地のファームントンのタウン=ミーティング議事録** イギリスの措置：ボストン港を軍事封鎖する強硬策を実施。

植民地側の受け止め：すべてのアメリカ人が分かち合うべき屈辱的なできごとととらえた。

**4 ベイン「コモン=センス」** 当初、イギリスからの独立支持者が少なかった状況を変化させ、独立支持の世論を形成して、アメリカの独立に影響を与えた。

## p.170~171 特集 アメリカ独立革命・フランス革命

**テーマの問い** アメリカ独立革命、フランス革命は基本的人権や国民(人民)主権といった政府のあり方などを提起し、国民国家の形成につながった。

**1 ホー=チ=ミンによるベトナム民主共和国の独立宣言** ベトナム民主共和国の独立の正当性を主張し、またフランスの植民地支配を批判する根拠となっている。

**2 アメリカ独立宣言** ①はすべて平等な人間がもっているはずの権利の実現、すなわち生命・自由・幸福の追求について、②は社会契約論にもとづく人民主権について、③は社会契約論にもとづく抵抗権を論拠に、アメリカの独立の正当性について主張している。「アメリカ独立宣言は、「すべての人」の権利を掲げたものであり、時代や地域をこえた普遍的な真理をと定める形になっている。この一方で権利の章典は、イギリス人の「古来の権利」を確認するものであり、特定の国民の歴史に根差した形をとっている。解説 ジョン=ロックの『統治二論』の箇所は、独立宣言の③に影響を与えたとされる部分である。この史料には、独立宣言の①にあたる権利に関する言及もある。ジョン=ロックが「生命・自由・財産」と表現した、人間が生まれながらにもっている権利を、独立宣言は「生命・自由・幸福の追求」とすることで、時代をこえた価値ある存在となったともいえる。なお、アメリカ独立宣言の原案には、植民地に奴隷制がもたらされた責任は国王に帰するとの言及があったが、黒人奴隷制度を容認していた植民地からの反対もあって、最終案では削除された。

**3 合衆国憲法** 「自由人以外」と「入国を適当と認める人々」は黒人奴隷を指し、独立宣言の①「すべての人」に黒人奴隷ならびに先住民は含まれていないという矛盾があることがわかる。(なお、女性も基本的には含まれていなかった。)解説 合衆国憲法の第1条第9節は奴隷貿易の禁止(⇒本文p.198)を定めたものである。黒人奴隷の存在は、例えば修正第5条(修正第1条から第10条は権利章典として1791年に合衆国憲法に挿入された)にある、「何びとも…自由…を奪われることはない」に矛盾しているように思われるが、憲法制定にたずさわった人々は、憲法上の「何びと」は合衆国市民(citizen)を指すとみなし、通常の間人より劣る人種とみなした黒人奴隷がそのなかに入ることは想定しておらず、1857年のドレッド=スコット判決(⇒本文p.198)などのように、「何びとも…財産を奪われることはない」という条文などから、黒人奴隷は憲

法に定められた財産とみなされた。

**4 フランス人権宣言** ①②は人間平等(人間が生まれながらにもっている権利〈天賦人権〉=自由・所有権・安全・抵抗権)について、③は国民主権について、④は言論の自由について、⑤は私有財産の不可侵について主張している(なお、第5条・第6条・第7条などには法による支配が、第16条には権力の分立が規定されている)。

ラ=ファイエットにより起草されたこの人権宣言には、人間の普遍的諸権利や、それを保障するための基本的原理が触れられている。そこにはアメリカ独立宣言やジョン=ロックの思想の影響に加えて、ルソーの天賦人権論『社会契約論』や第1篇第6章の「一般意志」にあるような一般意志説の影響がみられる。この人権宣言における平等は法の前の平等であり、所有権・私有財産の不可侵の確認にもとづいた経済活動の自由に力点が置かれているとみることもできる。

**5 オランブ=ドゥ=グージュの女権宣言** ① グージュがこの宣言を出したのは、フランス革命期に女性は男性と対等・平等な立場ではなく、政治に参加することも認められていなかったからである。この時代、「女性、子ども、外国人、そして、公的施設の維持に貢献しえない者は、公的問題に能動的に影響力を行使すべきではない。」(シェイエス)とされ、女性は男性に従うべき存在であり、男性でなければ政治に関わる権利を与えられることはなかった。

**6 フランス革命の記憶** ① 現代のフランスでは、フランス革命が国の礎とされ、国民統合をはかる役割を担っている。

#### p.172~173 フランス革命

**テーマの問い** フランス革命は、身分差や地域差、またギルドなどの特権団体による分断を解消し、均質な国民を創出した。そして、人権宣言において国民主権を明記し、国民が主体となって国を動かしていく仕組みを整えていった。

**2 「旧体制」の風刺画(「過去」)** ① 状態：第三身分による税負担の上に、第一・第二身分が楽をしている、すなわち第一・第二身分は免税などの特権をもつ特権階級であり、土地や公職を独占している状況を示している。この旧体制の下では第三身分は何らの政治的権利も与えられていなかった。**解説** 第三身分の内部にも格差があり、生活苦に追われる都市と農村の民衆、富を蓄えるブルジョワなどがいたが、どちらも第一・第二身分に不満をもっていた。こうしたなか、フランス革命は、貴族・ブルジョワ、農民・都市の民衆(サンキュロット)の思惑が複雑にからみあって進行したため、複雑な経過をたどることとなった。

**3 シェイエス「第三身分とは何か」** ① 第三身分とはフランスの国民であり、共通の法の下で暮し、同一の立法府に代表される協同体であると規定されている。

**3 「球戯場(テニスコート)の誓い」** ① 全国三部会は、国王が招集する身分制議会だが、国民議会は「国民の代表」による議会であるという点で異なる。また、「球戯場の誓い」は、議会在国王のものではなく国民のものだという認識の表れであり、これは人権宣言の第3条で、政治の決定権は国民にあるという国民主権の原則に高められた。

**3・1 封建的特権の廃止** ① 民衆の蜂起の原因を、民衆がしいたげられていたこととし、農奴制・領主裁判権・十分の一税の無償廃止や地代の有償廃止を決定し、また税負担の平等化や公職の開放を示した。

**3・2 「フランスの栄光の頂点・自由の極点」** ① フランス革命は、諸外国には「民衆の暴動」であり、国王が処刑されるなどの無秩序状態を生み出したと映った。

**3・3 言語の統一に関する国民公会での演説** ① 国の分断を防ぎ、地方と中央のコミュニケーションの円滑化をはかる必要

性があったため。また、言語を統一することで、国民統合を進める必要性があった。

**3・3 ロベスピエールの政府** ① 山岳派およびロベスピエールの独裁により恐怖政治が展開され、多くの人々が粛清される状況がもたらされた。**解説** ギロチンで処刑された人々の首が山のように積み、その惨状に処刑執行人のサンソンまでが最後に自分の首を落としている。この風刺画は、テルミドル9日のクーデタ以降に描かれたもので、ロベスピエールとその恐怖政治(テロル)への非難が込められている。山岳派独裁の時代は、革命裁判所が強化され、反革命派狩りがなされてギロチンで粛清された。

#### p.174~175 ナポレオン時代① ナポレオンの台頭と第一帝政

**テーマの問い** ナポレオンのヨーロッパ大陸制圧により、フランス革命の理念やフランス人権宣言などのフランス革命でつちかわれたものがヨーロッパに広がった。

**1 フランス民法典** ① 目的：人権宣言を法制化し、国民生活にその理念を浸透させて、フランス社会の近代化を進めること。

家族像：「妻は夫に服従する」など、女性の権利は認められていない規定であった。

**2 「ブルム=プディング危うし!」** ① 英首相は大西洋部分を、ナポレオンはヨーロッパ大陸部分を切り取っており、それぞれ注視し、勢力を拡大しようとする地域が示唆されている。

**解説** この風刺画には題名に続けて、「この2人の飽くことを知らぬ食欲を満たすには、この大きな地球そのものも、この地上にある一切のものも、何と小さいことか」と書き込まれている。風刺画自体は、1805年1月にナポレオンがイギリス側に提示した調停案を風刺したもののだが、英・仏のヨーロッパ覇権の争奪戦をみてとれる。目を見開き、軍刀でヨーロッパ大陸部分を切り取るナポレオンからは、その征服欲および執着心がみてとれる。

#### p.176~177 ナポレオン時代② ヨーロッパ諸国の抵抗

**テーマの問い** ナポレオンのヨーロッパ大陸制圧に対して、スペイン反乱など諸外国の反発や、フィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」などの講演、プロイセン改革などのナショナリズムの萌芽がみられた。また、フランス内部でも、戦争続きの状況に対する反発から、ナポレオンから人々の心が離れていったと思われる。

**3・1 ティルジット条約とロシア・プロイセン** ① この風刺画の背景には、ティルジット条約でロシアは大陸封鎖令に参加することとなり、プロイセンは国土の半分を失ったうえ、多額の賠償金を支払うこととなったことがあげられる。

**3・3 ナポレオンのロシア遠征とロシア** ① ロシア遠征や開放戦争によって、皇帝専制のもと議会もなく憲法もないロシアの後進性を認識することとなった。

#### p.178~179 中南米諸国の独立

**テーマの問い** アメリカ独立革命やフランス革命、ナポレオンによる本国の動揺などが影響を与えた。フランス植民地のサン=ドマングでは、黒人が革命の担い手となって、黒人国家ハイチの独立が達成された。中南米では、スペイン本国で成立した新憲法の影響もあって、クリオーリョの主導のもとで旧スペイン植民地の独立が各地で達成され、ポルトガル植民地のブラジルもクリオーリョが王太子を擁立して独立した。メキシコは、被支配層の蜂起による混乱のなかで、クリオーリョが主導権を握って独立した。

**1・2 植民地の独立** ① マラーのように、サン=ドマングの独立を支持する声もみられ、1794年に国民公会は奴隷制を廃止

した(ただし、国民公会が奴隷制を廃止した背景には、イギリス軍などのハイチ進出を防ぐためもあった)。

**2・2 クリオリーの反発** **Q** 気持ち離れた理由:同じ白人でありながら、政府がスペイン本国出身者に重要な地位を与えるなど優遇し、クリオリーが差別されていること。

拍車をかけた存在:アメリカ合衆国

**2・2 シモン=ポリバル『ジャマイカ書簡』** **Q** 資質的に優れた白人が主導し、その主導のもとにある先住民およびメスティーソという認識と、黒人をはじめとする有色人種への恐れをもっている。

**3 カニング外相の覚書** **Q** イギリスは自国の工業製品の市場となる期待からブラジルの独立を支持する一方、合法的な奴隷貿易の中心地であるブラジルが、奴隷という安価な労働力を使用し続けられる状況が続くと、すでに奴隷貿易を禁止しているなかで、イギリス植民地であるジャマイカの砂糖生産と貿易輸出における国際的競争力が低下し続けることを問題視したため。

**3 モンロー宣言** **Q** 独立した中南米諸国に介入しようとするヨーロッパ列強を非難し、南北アメリカ大陸とヨーロッパの相互不干渉を主張した。

**4 独立後の中南米諸国** **Q1** 自由貿易政策のもとで、欧米諸国から工業製品を輸入し、自身は原料や食料の輸出に依存するモノカルチャー経済の形で、経済を発展させた。

**4 独立後の中南米諸国** **Q2** 奴隷貿易の禁止・奴隷制の廃止にともなって、中国人労働者(苦力)の導入が進んだ。

#### p.180~181 ウィーン体制とヨーロッパの政治・社会の変動①

**テーマの問い** ウィーン体制は、正統主義(フランス革命前の状況を正統とみなす)と勢力均衡を基盤とする大国の利害一致で形成された、ウィーン会議の決定事項を基盤とする国際秩序であるが、支配層が一方向的に決めた体制であり、フランス革命やナポレオン時代を受けて広がりつつあった自由主義やナショナリズムを配慮したものではなかった。

**1 ウィーン会議の風刺画** **Q** オーストリア皇帝がロンバルディア・ヴェネツィアを獲得し、ロシア皇帝がポーランド王を兼任するなど、正統主義を原理としつつも、大国の利害一致・勢力均衡の観点から妥協ははかられた。

**2 プルシェンシャフトの運動** **Q** あの戦争:解放戦争  
主張:ドイツの統一と自由

**3 ドラクロワ「民衆を導く自由の女神」** **Q** 絵画でのイメージは、民衆を中心に革命がおこされ、政治が民衆のものになった印象を受けるが、実際には7月革命の結果、ルイ=フィリップが即位し、一部の富裕層に富が集中し、多額納税者だけに選挙権を認める制限選挙であった。**解説** トリコロール(三色旗)を掲げて民衆を導く自由の女神を中心に、右横には二丁の拳銃をもつバリの腕白小僧、左横にはドラクロワ自身とされるシルクハットの男性、その足元には自由のための戦いで死者が描かれている。

#### p.182 ウィーン体制とヨーロッパの政治・社会の変動②

**テーマの問い** ウィーン体制維持の中心であったメッテルニヒの失脚や、1848年革命にみられた、自由主義的改革運動と独立・自治を求めるナショナリズム運動をまはや抑制することが難しくなった点からウィーン体制は消滅したといえる(ただし、列強間の協調に関しては、クリミア戦争まで続いた)。

**2 ドーミエ「ガルガンチュア」** **Q** 風刺画:七月王政下では、民衆から重税を集める一方で、富裕層に富が集中し、多額納税者だけにしか選挙権が与えられていなかったことを批判している。**解説** ルイ=フィリップが、ラブレールの小説の主人公ガルガンチュアそっくりに、一般民衆から搾取した税金を

むさぼり、そのルイ=フィリップの排泄物(勲章や任官状、特権など)を議員たちがむらがり奪いとっている。「民衆を導く自由の女神」(→本文p.181)が描き出す理想とは異なり、七月王政下では、多額納税者だけしか選挙権が認められない、制限選挙であった。その社会のひずみを鋭く風刺したドーミエだったが、この作品で有罪判決を受け、のちに投獄された。トクヴィル:政府や富裕市民層の責任を問う革命的気運や、制限選挙に反発する中小市民層および一般民衆のあいだに選挙権拡大運動が広がっている状況を「活火山」との言葉で表現している。

**3 「普遍的な民主的かつ社会的な共和国—協定」** **Q** 手前に王冠などが打ち捨てられ、1848年革命が生じたフランスやドイツなどの国旗がみられることから、この時期に自由主義的改革やナショナリズムの動きが広がったことをふまえて描かれたと考えられ、国は王侯貴族のものではなく、国民のものであるとの認識が広がったとみてとれる。

**3 バラツキー「フランクフルトへの手紙」** **Q** フランクフルト国民議会は、ドイツの統一と憲法の制定をめざし、ドイツ国民を形成することをめざしたが、バラツキーは、諸民族の存在を自然権として訴え、ドイツ国民への同化につながるこの動きを批判した。

#### p.183 社会主義思想の成立

**2 「共産党宣言」** **Q** 歴史は階級闘争の歴史であり、万国のプロレタリアが団結して資本家を倒す共産主義革命が生じるだろうと主張している。

**4 ベルンシュタインの修正主義** **Q** プロレタリア独裁などではなく、議会制民主主義のなかで、社会主義の実現をはかるべきであると主張している。

#### p.184~185 列強体制の動揺とロシアの大改革

**テーマの問い** クリミア戦争以降は農奴解放令などの国内改革を推進したが、立憲制や議会政治の導入には至らなかった。

**3 レービン「ヴォルガの船曳き」** **Q** 船曳きという労働の過酷さとともに、ロシア社会の後進性や帝政ロシアの圧政にあえぐ民衆の声が感じられる。

**3 ナロードニキ** **Q** 都市の学生ら知識人層の出身者であり、絵画からはそれなりに豊かな家庭の出身者であったと推測できる。

#### p.186~187 バクス=ブリタニカ期のイギリス

**テーマの問い** 自由党と保守党による議会議政政治が展開され、選挙権の拡大などの議会改革が進み、またインドへの道を確保するなどの対外進出も進んだ。その経済力・軍事力を背景に、イギリスは世界の超大国となり、イギリス通貨ポンドが世界の基軸通貨となるなど、大きな影響力をもった。

**2・2 チャーティストの請願** **Q** 男性普通選挙制や議員の財産資格撤廃などを要求した。

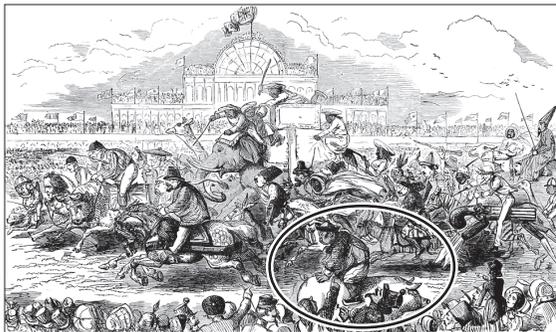
**2・3 反穀物法同盟の結成** **Q** 穀物法:国内の農業生産者を保護するために、外国産穀物の輸入を制限する法。  
支持した人々:穀物法により高い食べ物を購入せざるを得なかった労働者や、自由貿易を求める資本家(安価な穀物が供給されれば、労働者の賃金を安くおさえることができることも理由だった)。**解説** 穀物法は、ナポレオン戦争終結後にヨーロッパ大陸諸国などからの安価な穀物が流入して国産穀物の価格が下落するのを防止するために、地主や農家の働きかけによって1815年に制定され、外国産の穀物輸入を制限した法である。イギリスの地主層は、鉄道、鉱山などにも利害をもち、また投資家でもあったため、自由貿易政策を遂行してきたが、みずからの経済的基盤を支えてきた穀物法の廃止に

は同意しなかった。こうしたなか、資本家らを中心に抜本的な貿易自由化を求める声があがり、1839年にマンチェスターの資本家らが中心となって反穀物法同盟が結成された。なお、穀物法廃止後のイギリスには、実際は安価な穀物が大量に流入することもなく、穀物法廃止が契機となってイギリス農業の経営改良と集約化が進み、その後繁栄期を迎えた。

**3 「劇場総支配人の部屋にて」Q** きちんとした立ち姿で「真面目なハラハラドキドキ」を提案しているグラッドストーン(自由党)は国内改革を重視し、国内およびアイルランド政策に尽力したが、アイルランド自治法案をめぐる紛糾した。一方、親しげな姿で「ドタバタ喜劇のいいアイデアがある」といっているディズレーリ(保守党)は、対外政策を重視し、スエズ運河会社の株の買収(1875年)などインドへの道確保やインド帝国の成立(1877)に尽力した。**解説** グラッドストーンは対外進出には消極的であり、マフディー運動(1881~98年)に際してゴードンが戦死(1885年)したことに対し、ヴィクトリア女王はグラッドストーンが援軍をおこたったからだと思難した。このできごとを機に、グラッドストーンはGOM (Grand Old Man)という渾名をもじってMOG (Murderer of Gordon <ゴードンの殺害者>)と揶揄されるなど、評判が落ちたという。一方、ディズレーリ(保守党)は、対露強硬姿勢をとるヴィクトリア女王の指示もあって、ベルリン会議(1878年)に出席し、ロシアの南下を阻止してキプロス島の占領・行政権を確保した(⇒本文p.194)。

**4 女王の新しい冠Q** 風刺画は、ディズレーリ首相の尽力もあって、インド帝国の成立とヴィクトリア女王がその初代皇帝に即位すること(実際は1877年)を表している。**解説** ヴィクトリア女王は、格付け上、自身および直系の男子の子や子孫の上に、娘の子が皇帝や皇后として位置づけられるのを快く思っていなかった。女王自身「これで今後は、署名するとき、みずからの名の後にR&I (Regina et Imperatrix <ラテン語で女王そして女性皇帝>の略称)と記すことになるだろう」と日記に記すなど、満足げな姿勢を示している。そうした点でも、インド皇帝即位は、ヴィクトリア女王自身の気持ちにかなうものであった。一方で、インド帝国成立時のインドには、大飢饉という大きな問題が生じていた(⇒本文p.209)。

**4 1851年の大ダービーQ** 清(中国)を表す人物は、風刺画の真ん中前方にいる、他とは異なり逆走する豚に乗る辮髪の人物(囲みの部分)。アヘン戦争(1840~42年)や第2次アヘン戦争(1856~60年)でのイギリスの勝利もあって、清(中国)を過去にとらわれた姿、後ろ向きに前進している姿で描いていると考えられる。



#### p.188~189 特集 一体化する世界 情報と交通

**テーマの問い** 交通手段や通信網の発展(交通革命・通信革命)は、世界の一体化を推進した。またヨーロッパ・アジア間の時間距離の短縮などは、ヨーロッパによる進出や植民地化の進展にもつながった。

**1・2 ロンドン万博とトマス=クックQ** 「世界の工場」として

のイギリスの工業力など、イギリスの絶大な国力を世界にアピールする意義があった。

**2 「世界一周旅行」Q** 鉄道や蒸気船などが発達した。

**2・1 スエズ運河開通による航路ごとの距離Q** 時間・距離を短縮させ、とくにヨーロッパとアジアを近づけた。

**2・2 世界一周の行路Q** アメリカ合衆国の大陸横断鉄道やスエズ運河を利用した。

**2・2 「八十日間世界一周」Q** 東回りで世界一周をしたことにより、日付変更線をこえたため1日稼いだから。

**3・1 世界を一周する電信網(20世紀初頭)Q** イギリスの植民地・自治領を結ぶ形でひかれたから。

#### p.190~191 フランス第二帝政と第三共和政

**テーマの問い** ナポレオン1世の威光を活用しつつ統治されたナポレオン3世の第二帝政は、実際は農民・資本家・労働者のバランスを取る必要や、対外遠征の多さなどから安定していたとはいいがたい。一方でパリ市の大改造や産業の活性化などの政策は、現在のフランスの基盤ともなった。ドイツ=フランス戦争の敗戦を受けての第三共和政は、ドイツに対する復讐心から様々な問題を抱え、国民統合をはかるためにフランス革命などの歴史的遺産を活用した。

**2 ルイ=ナポレオン「ナポレオンの観念」Q** 国民統合を進め、また農業をはじめとする産業の振興、交通網などのインフラの整備をおこない、フランスの秩序を取り戻し、再建すること。

**2 大ナポレオンと小ナポレオンQ1** 1851年12月2日は、1848年12月にフランス第二共和政初代大統領に就任(任期4年・1852年5月まで・再選不可)したルイ=ナポレオンが、クーデタで議会を解散し、男性普通選挙の復活を訴えて民衆の支持をとりつけつつ権力を掌握した日である。

**2 大ナポレオンと小ナポレオンQ2** 包帯の「メキシコ」はメキシコ遠征(1861~67年)を指す。メキシコ遠征によりメキシコ帝国を創設したナポレオン3世は、その初代皇帝に、オーストリア皇帝フランツ=ヨーゼフ1世の弟マクシミリアンをつけた。しかしアメリカ合衆国の介入もあり、フランスは撤退した。マクシミリアンはメキシコ政府軍に捕縛され、銃殺刑に処せられた。

**4・2 「共和政の勝利」Q** 共和政の象徴マリアンヌ像の設置を進めたり、バステューエ牢獄襲撃の生じた7月14日を祝祭日にしたり、ラ=マルセイエーズを国歌にするなど、フランス革命を原点とする国民統合を進めた。

**4・2 ドーデ「月曜物語—最後の授業」からみるアルザスQ** この小説から、アルザス地方ではドイツ=フランス戦争前は国語としてフランス語の教育がおこなわれていたこと、戦後この地がドイツ領となったことから、それが禁止されたことが読み取れる。**解説** アルザス地方ではドイツ語系アルザス語が話されていたが、近年ではフランス語を日常的に話す人がかなりの割合にのぼっている。

#### p.192~193 イタリアの統一とドイツの統一 新国民国家の形成

**テーマの問い** イタリア統一は、サルデーニャ王国主導という形で、フランスのナポレオン3世やプロイセン=オーストリア戦争などの国際情勢を利用しつつ、統一が進められた。領土的統一は、イタリア王国成立時には完成しておらず、1870年にもちこされたうえ、地域性の強さから国民統合に課題があった。ドイツ統一は、すでにドイツ関税同盟という経済統合がはかられつつあった土壌に、プロイセン主導が進められたが、ドイツ帝国成立後も、国内の意識統一には課題が残された。

**1・2 ダゼリオ「わが回想」Q** 国民とは均質・統合された存在

であるが、イタリアでは地域性などが強く、国民統合が進まないという課題を抱えていた。

**3・3 ビスマルクの鉄血演説** **Q** 自由主義ではなく、軍事力の強化によってドイツ統一をはかるべきだとしている。また、誤りとしているのは、1848～49年に開かれたフランクフルト国民会議。**解説** 1862年にプロイセン首相となったビスマルクは、下院で軍事予算が否決されると、この「鉄血演説」をおこない、強引に軍制改革を推進した。なお、鉄は兵器、血は兵士を指しているとされる。

#### p.194～195 ドイツ帝国の成立とオーストリア＝ハンガリー帝国の動向

**テーマの問い** ビスマルクの政策：内政では国民統合の障害と考えられた、南ドイツや旧ポーランド領地域のカトリック教徒とのあいだに「文化闘争」を引き起こし、また社会主義者を弾圧しつつも社会保障政策を拡充させて労働者を国民として取り込み、高関税政策を実施するなどして工業化を推進した。対外的には、アルザス・ロレーヌ問題から、フランスの孤立を外交では推進し、列強間の利害調整をおこなった。オーストリアの支配体制：多民族帝国であったオーストリアは、非スラブ系のマジャール人にハンガリー王国を認め、同君連合のオーストリア＝ハンガリー帝国として、帝国内のスラブ諸民族の自立の動きをおさえようとした。

**3・2 ビスマルク外交による同盟網** **Q** 孤立した国：フランス理由：ドイツ＝フランス戦争でアルザス・ロレーヌをフランスから獲得したドイツに対し、フランスがその奪還をねらって他国と同盟や条約を結ぶ可能性があったから。

**3・2 「鉄道の分岐器での仕事」** **Q** ロシア＝トルコ戦争の結果、1878年に結ばれたサン＝ステファノ条約は、ロシアの南下政策が進展する内容であった。このロシアの南下は、「インドへの道」確保を進めるイギリスにとっては認めがたいものであったため、対立が生じた。ビスマルク外交の目的の1つは「フランスの国際的孤立」をはかることにあるが、それが国際的紛争や対立で崩れることを避けたいため、調停者となった。

**3・2 二重帝国の成立** **Q** 帝国内のスラブ諸民族の自立の動きを抑圧するために、非スラブ系のマジャール人にハンガリー王国を認めた。

#### p.196～197 アメリカ合衆国の領土拡大

**テーマの問い** アメリカ合衆国の領土拡大は、獲得した領土を白人の住処とすべく西漸運動がセットで進んだ。そのなかで、民主主義の意識は広がるも、それは白人男性のみに限定された。また、未開発と開発の境目として意識されたフロンティアの西漸は、先住民の住環境や生存権を奪い、自然破壊などもたらした。

**2 「アメリカの進歩」** **Q** 右手に文明の書・左手に電線をもつ女神が東から西に歩いていることから、西漸運動が東から西へと進められ、フロンティアもそのように進んでいることがわかる。女神の通った東側は、鉄道が通り、開拓者が入植して開墾が進み、畑などもつくられている。この絵は西漸運動が白人による文明化であることを表現している一方、画面の西側には、開拓が進むにつれて追いやられた先住民やバッファローが描かれており、暗に先住民が生活圏を奪われ、自然が破壊される様も描いている。

**2 オサリヴァン「併合論」** **Q** 神の示した「明白なる運命」という言葉により、神意であるとして正当化している。

**3・2 ジャクソン大統領の先住民の強制移住に関する教書** **Q** 西漸運動の最中、白人入植者に土地を与えるために、ジャクソンが先住民の土地を買い上げ、また保留地を設けて強制移住

させる政策を実施したことにより、先住民たちは先祖代々の土地を失い、故郷を追われた。

#### p.198～199 南北戦争

**テーマの問い** 奴隷問題が注目されるが、実際には西漸運動にもない、経済基盤・貿易への認識・政治主張の異なる商業中心の北部と農業、プランテーション中心の南部の争いであった。北部が勝利したことにより、アメリカ合衆国は工業国への道を歩むこととなるが、黒人問題は置き去りにされ、法的な平等は達成されたとしても、実質的な平等とは程遠い状態におかれた。

**1 アメリカ「不」合衆国—黒人問題** **Q** 風刺画では黒人奴隷が南北を切り裂いており、南北対立を表している。南北対立の背景には、西部の新州が奴隷州(南部)になるか自由州(北部)になるかは、連邦議会での優位、アメリカ合衆国の政治・経済の政策に大きく影響を与えることがあった。

**2 南北戦争の目的** **Q** 南北の分裂を防ぎ、アメリカ合衆国を1つの国として維持すること。

**3・2 ミシシッピ憲法** **Q** 黒人の識字率の低さや、シェアクロッパーなど経済力のない黒人の実態を踏まえ、憲法修正第15条に違反しない形で制限している。

**3・4 最高裁判所判決～「分離すれども平等」** **Q** 「分離すれども平等」とは、白人と同様の施設や設備が黒人にははじめとする有色人種に提供されていれば、白人施設・設備から黒人を排除・隔離したとしても「平等」であり「差別」ではないという認識であり、こうした根拠にもとづき社会的に黒人を分離することは合法とみなされた。

#### p.200～201 アメリカ合衆国の大國化

**テーマの問い** 南北戦争後のアメリカ合衆国では、工業化が進展した。経済発展の裏で、労働問題や独占資本の形成と政治的汚職、安い労働力として移民が必要とされる一方、WASPとは異なる移民に対する排除・排斥の動きが強まるなどの問題を抱えた。

**2・1 アメリカ合衆国への移民数(1820～1970年)** **Q** ヨーロッパにおける人口増加もあって、19世紀にはヨーロッパからアメリカ合衆国への移民が急増した。1880年代までは、主としてイギリスやスカンディナヴィアなどの北欧、ドイツ(1848年革命などもあって、増加した)などからの移民が流入した。彼らは西部の自営農民となったり、高い技術をもつ熟練工として、発展途上にあったアメリカ合衆国の産業を支えた。一方、この時期にはジャガイモ飢饉(1845～49年)などによりアイルランドからの移民が増加し労働者などになった。アイルランド移民はカトリック信者であり、プロテスタントではないために差別を受けることもあったが、英語を理解できることや団結の強さもあって、移民が増加した。

1880年代以降になると、経済的な変動や政治的な不安定さが続く東欧や南欧からの移民(新移民)が増加した。新移民の大半は非熟練の低層労働者となり、その安価な労働力に支えられて、アメリカ合衆国は世界最大の工業国となった。

これとともに1860年の北京条約(第2次アヘン戦争戦争講和条約)で、中国人の海外渡航の自由が承認されたこともあって、中国系移民(苦力と呼ばれる年季労働者となった)が増加した。中国系の年季労働者はアイルランド系移民とともに大陸横断鉄道(1869年完成)の建設にも貢献したが、白人低層労働者と競合したため、排斥運動が展開され、1882年の移民法改正によって中国系移民は禁止された(19世紀後半以降は、中国系移民に代わり、日系移民が増加した)。

20世紀になると、WASP以外、あるいは技術をもたない移民を制限すべきとの声から1917年には識字テスト法が成立した

ほか、カリフォルニアなどを中心に排日移民運動が激化し、1924年には排日移民法が定められた。

**2・3 新顔—カミングマンの登場** **Q** 安価な労働力として、白人の低賃金労働者から仕事を奪う存在とみなされたから。

**2・3 読み書きテストの提案** **Q** 求めている移民：WASPに近い移民であり、英語圏からの移民やドイツ人・スカンディナヴィア人・フランス人など、アメリカ合衆国に貢献することができると考えられる移民。

流入を避けたい移民：WASPとは異なる、異質な移民であり、イタリア人などの南欧、ロシア人・ポーランド人・ハンガリー人・ギリシア人などの東欧、アジア人など、アメリカ合衆国が公的な扶養をしなければならないなど、経済的負担をもたらす移民。

課題：これまで同化吸収したことのない異質な移民の流入により、アメリカ合衆国市民の質の変容が生じ、アメリカ合衆国のアイデンティティが揺るがされる課題を抱えたと考えられる。

## p.206～207 西アジア地域の変容

**テーマの問い** オスマン帝国・ガージャール朝は列強の進出により、領土の縮小だけでなく、経済的従属下におかれた。エジプトでは、ムハンマド＝アリーのもと、富国強兵・殖産興業政策がとられたが、スエズ運河建設などによる莫大な債務もあり、列強の経済的従属下におかれた。こうしたなか、オスマン帝国ではタンジマートが進められ、オスマン帝国憲法(ミドハト憲法)が制定され、またエジプトでは、ウラービー運動が展開されて立憲制の導入が主張されるなどの改革運動がみられた。また、イランでは、経済的苦境に対するパーブ教徒の反乱や、タバコ＝ボイコット運動などの民族運動がみられた。

**2 エジプトの動向** **Q** イギリスとインドとの時間的距離の短縮につながり、イギリスとインドとの結びつきを強めた。

**解説** イギリスにとっては「インドへの道」を確保する意義があり、またのちにエジプトに進出する背景ともなった。

**2・1 エジプトとスーダンの運動** **Q** エジプトでは、立憲制の樹立と議会の導入を求めるウラービー運動が、スーダンではイギリスの進出に反発するマフディー運動が展開された。

**3 オスマン帝国の改革路線** **Q** ①オスマン主義(オスマン国民を創設し、法治主義にもとづいた近代国家を建設する) ②パン＝イスラーム主義 ③トルコ主義(トルコ民族主義/史料では、トルコ人という観念や、トルコ文字、トルコ人の統一などが続けてあげられている)

**3 ギュルハネ勅令～タンジマートの開始～、オスマン帝国憲法(ミドハト憲法)** **Q** タンジマートは、イスラーム法にもとづく体制のうえにヨーロッパの諸制度(司法・行政・財政・軍事)を取り入れた、大規模な西欧化改革であった。また、オスマン帝国憲法は、イスラーム教を国教としつつも、宗教の自由を認め、宗教その他において多様な人々をオスマン人と称する臣民(国民)と定めた国家を想定している。

**3 「もっと泡を！」** **Q** 改革に実現性や現実味がなく、うまくいかない(泡のように消える)と評価している。**解説** 泡に書かれた年代と、その時期にオスマン帝国が抱えていた対外戦争(1839→第2次エジプト＝トルコ戦争・1856→クリミア戦争 1877→ロシア＝トルコ戦争)をあげ、またそれぞれの関係性を考えてもいいだろう。

**4 イランの動向** **Q** ガージャール朝は、イギリス(左/ライオン)とロシア(右/熊)の進出に悩まされていた。ロシアには、1828年のトルコマンチャーイ条約で、南カフカス(南コーカサス)の領土を割譲したうえ、治外法権を認め、関税自主権を喪失した。また、イギリスなど列強の経済的進出を受けた。

## p.208～209 南アジアの植民地化

**テーマの問い** 植民地化されたインドでは、イギリス産綿織物の市場・原料供給地となり、また中国向けアヘンの栽培が進んだ。このなかで仕事を失った手工業者や、イギリス東インド会社による地税制度のもとで、1人だけが土地所有者となり、その他の人の従来の権益が無視された。そのうえ、飢饉なども生じ、人口が減少した。

**3 マルクスの新聞への寄稿「インド軍の反乱」** **Q** 反目していたムスリム(イスラーム教徒)とヒンドゥー教徒が連携・団結して反乱をおこしている点や、反乱が限定された地域だけでなく広範囲である点など。シンボルはムガル皇帝。

**4 ネルーがみたインドの植民地化** **Q1** 質の高い手織りのインド産綿織物→変容：イギリス産綿織物市場としての役割を求めるようになった。

**4 ネルーがみたインドの植民地化** **Q2** スエズ運河。

**4 ネルーがみたインドの植民地化** **Q3** イギリス東インド会社は、1765年にベンガルなどの徴税権を得て、厳しく地租を取り立てた。こうした政策は飢饉をもたらし、全人口の3分の1が野垂れ死するなどの事態を引き起こした。

**4・1 インドとイギリスの綿織物の輸出** **Q** 1820年頃、イギリス産業革命により、イギリス産綿織物が増産され、輸出されるようになった。

**4 ガンディーがみた植民地支配下のインド** **Q** 鉄道。また鉄道により伝染病が拡大したり、穀物の輸送・販売により飢饉が広がるなど、社会的悪がもたらされたとしている。

**4・2 インドの鉄道網** **Q** 綿花地帯。

**4・4 1860～70年代のインド主要輸出品** **Q** アメリカで南北戦争が生じたから。アヘンは中国へ輸出されていた。

## p.210～211 東南アジアの植民地化

**テーマの問い** タイ以外の地域は欧米諸国の植民地支配下におかれ、経済的には本国経済を支えるモノカルチャー経済となった。また、英領植民地などには、インド人労働者や中国人の苦力などが流入し、現在の民族構成にも影響を与えた。

**2・2 在西欧のシャム王族・官吏による国政改革に関する意見具申書** **Q** 提案：軍事力で抵抗するのではなく、地理的に英仏植民地のあいだにあるため緩衝国として残る道を模索しても領土が縮小する可能性が高いので、表面的ではない、根本的な西洋改革(おそらく立憲制を指す)を推進して文明化すべきであると提案している。

日本：立憲制を導入するなど西洋的な法制度を整備した近代国家となり、西洋と同等の立場であると主張できる状況にあるとしている。**解説** この意見具申書が提案する根本的な西洋改革とは、立憲制の導入であろうと考えられるが、実際にシャム(タイ)で立憲制が実現したのは、1932年のタイ立憲革命によってであった。

**2・3 ラッフルズによる書簡** **Q** 自由貿易港の役割をもった植民地。

**2・4 オランダによる強制栽培制度** **Q** 耕地の5分の1をヨーロッパ市場向けの生産物(コーヒーなど)の栽培に供与したことにより、食料不足が生じた。

**2・5 アメリカの太平洋進出** **Q** 中国市場進出の足がかりという目的があった。

**2・6 東南アジア各国の主要輸出品の割合** **Q** 農産物や鉱産資源の輸出が地域の経済を支えるモノカルチャー経済となった。

**2・7 半島部マレーシアの民族別構成比(%)、イギリスのマレー半島植民地経営** **Q** イギリス支配下のマレー半島には、オランダ領植民地や中国、インドなどからの移民が流入し、中国系が増加するなど、半島部マレーシアの民族構成に影響を与えた。

p.212～213 東アジアの激動① 中国の開港と欧米諸国との条約

**テーマの問い** 背景：産業革命により、イギリスが中国に対して自由貿易や市場を求めた。

影響：日本では、アヘン戦争の影響もあり、異国船打払令を緩和して天保の薪水給与令が出されたり、第2次アヘン戦争の影響として、日米修好通商条約の締結がなされた。

**2・1 中国へのアヘン流入と銀の流出、アヘン窟** 清からの銀の流出をもたらした、アヘン中毒者の急増や清の財政難につながった。

**3 不平等条約の締結** 南京条約：第2条…広州・厦門・福州・寧波・上海の開港。第3条…イギリスに香港島割譲。第5条…行商を通じた貿易の廃止。

虎門案追加条約：第8条…イギリスに片務的最恵国待遇を認める。第9条…イギリスに領事裁判権を認める。

望厦条約：第21条…アメリカに領事裁判権を認める。

アヘン戦争の目的：自由貿易を実現し、中国に市場を拡大すること。

**4・1 イギリスの対インド・中国貿易の推移** インドアヘンの中国向け輸出はのびているが、英綿織物の中国向け輸出はのび悩んだ。

**4・2 中英北京条約(1860年10月、イギリスに対する条約)** 中国人が苦力(低賃金契約労働者)としてイギリス領の植民地・自治領やアメリカ合衆国に流入する状況につながった。アメリカ合衆国では、白人から仕事を奪う存在として排斥の対象となった。

**4・3 長崎海軍伝習所のオランダ人教官による記録** 影響：第2次アヘン戦争の講和条約である天津条約(1858年)を結んだ英仏艦隊が日本に来航するとの情報を使って、アメリカ総領事ハリスが徳川幕府に条約の締結をせまったことにより、日米修好通商条約の締結につながった。

日本国内：攘夷運動がみられた。

p.214～215 東アジアの激動② 清の内乱と秩序の再編

**テーマの問い** 太平天国の内乱などを抱えたことにより、その鎮圧に活躍した漢人官僚らにより富国強兵や近代化事業を推進する洋務運動が展開され、国内秩序の再編がはかられたが、中体西用の傾向が強く、改革は進まなかった。

**3 左宗棠によるイリ回収問題についての答申** 開港・自由貿易を求める西洋諸国の進出(アヘン戦争・第2次アヘン戦争)だけでなく、ロシアの南下にさらされた。また国内では、太平天国をはじめとする国内反乱を抱えていた。

**4 辮髪を切る太平天国軍** 辮髪を切ることは、清への反乱・抵抗の意志を表す意味がある。

**4 曾国藩の檄文** キリスト教の影響を受けた太平天国およびその政策は、中国の根幹である儒学にもとづく統治を揺るがすものであるとして、太平天国の討伐を呼びかけた。

**5 李鴻章による上奏文** 太平天国の内乱の鎮圧に際して、欧米の近代兵器の威力を認識したから。

**5 中体西用** 儒学こそ中国の根本学問、政治や制度の主体・土台であり、西洋の学問や技術は、富国強兵のために中国に足りない部分を補う存在であるとの認識。

p.216～217 東アジアの激動③ 明治維新と東アジア国際秩序の変容

**テーマの問い** 欧米諸国の進出と日本の台頭に対して、清は朝貢関係を実質的なものにかえようとして朝貢国に対する影響力強化をはかった。このことは、ベトナムにおいて清仏戦争、朝鮮において日清戦争をまねいた。

**2 ベリー来航** 貿易(通商)および捕鯨に従事するアメリカの遭難者の保護や、石炭・食料・水などの補給(開港)を求め

て開国を要求した。**解説**史料には「私がベリー提督を強力な艦隊とともに派遣し、陛下の名高い江戸市を訪問させる唯一の目的は、友好、通商、石炭と食料の供給、および難破した国民の保護にある」と続いて述べられている。

**2 日米修好通商条約** 共通：日本は日米修好通商条約で、アメリカ公使の江戸駐在を認めており、清も北京条約で外国公使の北京駐在を認めている点や、領事裁判権や関税協定権などの不平等条項を認めている点。

相違点：踏絵を廃止したものの、日本ではキリスト教の布教の自由は認められていないが、清では認められている点、アヘン貿易を合法化している清に対して、日本はアヘン貿易は厳禁とされた点があげられる。

**3・2 日本の産業の発展** 輸入綿花を原料に、綿紡績業で産業革命が生じたことがわかる。ただし、原料を輸入綿花に依存していたことが課題であり、貿易赤字が生じた。

**3 康有為のみた明治維新** 対外的にはアメリカ合衆国やイギリスの開国・貿易要求にさらされ、国内は、天皇と將軍に権力が二分されているうえ、將軍のもと封建的な支配体制がとられていた。だが、明治維新により、天皇に権力は一本化されて中央集権的な国家体制へと移行し、また文明開化をはじめ政治・文化の西洋化が進められて立憲国家となり、領土を拡大・画定するなど西洋の大国と並ぶ列強となった。

背景：幕末に締結された不平等条約の改正という課題を抱えていた。

**4 江華島事件から日朝修好条規締結まで** 条約：日本が江華島事件により開国をせまり、日朝修好条規は結ばれた。

内容：朝鮮を日本と「同等」の自主の邦とし、釜山などをはじめとする3港の開港や、日本が西欧諸国と結んでいる条約から削除したいと熱望している、領事裁判権を日本に認めることなどが定められている。

p.218～219 東アジアの激動④ 日清戦争

**テーマの問い** 日清戦争の結果、朝鮮の独立を清が認めたことにより、清の属国は消滅した。また、清に日本が勝利したことにより、東アジアで日本が台頭し、清はより列強の進出を受けることになった。そのうえ、東アジアでは、南下を進めるロシアと日本の対立が深まるようになった。

**1 李鴻章とアメリカ合衆国駐清公使ヤングとの会話** 朝鮮に関するキーワード：自主・清朝の門戸・清朝の邦土・属国・朝貢国

日本に関するキーワード：敵国・敵対勢力

朝鮮は、17世紀の清の侵攻(⇒本文p.119)により清の属国(注1)となり、李鴻章が「清朝の門戸」とのべているように、東三省と呼ばれる満洲族の根本重地の防壁として、軍事的に重要な地である。だから、朝鮮が朝貢にともなって定められた儀礼を果たしてしまえば、その内政・外交は朝鮮の自主が認められ、宗主国の清側は干渉しないが、一方で朝鮮の独立は清の存続に関わる以上、無関心ではいられない。李鴻章はこの史料のなかで日本を「敵国」「敵対勢力」と表現するなど、朝鮮をねらう存在として非常に危険視している(なお、李鴻章は日本を「明代の倭寇」になぞらえることもあり、清を中心とする秩序に従わない、武力で略奪する存在とみなしていたと思われる)。李鴻章は、1871年の日清修好条規の第一条「兩國に属したる邦土も各々礼を相待ち、いささかも侵越する事なく、永久安全を得せしむべし」で、日本を牽制したつもりであったが、台湾出兵(1874年)・琉球処分(1879年)・壬午軍乱(1882年)といったできごとがおきたことから、「それなら日本に、清朝の邦土奪取(李鴻章自身の説明によれば、邦は朝貢国を、土は内地・各省を指す)をやめさせよ」と、この史料のなかでのべている。

注1 朝鮮の場合は朝貢だけでなく、冊封されて清の皇帝と朝鮮国王とのあいだで君臣関係が結ばれている。

**1 李鴻章とアメリカ合衆国駐清公使ヤングとの会話(Q2)** ④ 壬午軍乱(1882年) ⑥ 台湾出兵(1874年) ③ 沖縄県の設置(琉球処分・琉球領有)(1879年)

詳細な説明は、教科書p.256～257を参照のこと。

**1 李鴻章とアメリカ合衆国駐清公使ヤングとの会話(Q3)** 李鴻章が考える国際秩序とは、冊封・朝貢体制(⇒本文p.115)であるが、ヤングの主張する欧米の国際秩序(万国法にもとづく国際体制)では、朝貢国という曖昧な存在はありえず、領土は国境線で明確に区切られた領域との認識を示している。また、「自主」は現在では「他からの干渉や保護を受けず、独立していること」を意味するが、李鴻章は自主≠独立との意味合いで使用している。ヤングは、朝貢は儀礼的な存在で朝鮮は独立国とみなしてよいのか、それとも朝鮮は清の従属国なのかと判然とせず、李鴻章のいう朝鮮の「属国自主」という不可解な立場を理解できていないとみることができる。

**1 朴泳孝のパークスに対する発言(Q1)** 朴泳孝は、朝鮮の内政外交は自主であるにもかかわらず、壬午軍乱を機に清の干渉が強まり、朝鮮の独立をおびやかしていると考えている(なお、この認識は朴泳孝だけでなく、金玉均らにも共通してみられるものである)。一方、清の李鴻章は上の史料からも、壬午軍乱で日本の軍艦が朝鮮に派遣されたことを危険視し、朝鮮=清の属国という立場から、宗主国たる清が朝鮮への干渉を強めることは当然の権利行使と考えている。その点からすると、朝鮮の「属国自主」という立場は、朝鮮側・清側とのあいだに大きな認識の隔りがあったとみることができる。

**1 朴泳孝のパークスに対する発言(Q2)** 本文p.216参照。金玉均や朴泳孝らは、清が朝鮮の自主をおびやかすようになったことに反発し、朝鮮の自主を守るために清から独立して近代化政策を進めようと、1884年に甲申政変をおこした。このことは、甲申政変に際して金玉均が出した政綱の第1条に壬午軍乱を機に清に拉致された大院君の帰国(金玉均らはこのできごとでも清の朝鮮に対する過干渉ととらえていた)に附記して「清国への朝貢虚礼を廃止する」ことが記されていることからわかる。なお、金玉均は日本・朝鮮は東洋のイギリス・フランスになるべきと考えていたとされ、その点からすると彼は朝鮮を列強化しようとしていたとみることができるだろう。

**2 日本の朝鮮侵攻、朝鮮での闘鶏(Q)** 甲午農民戦争(東学の乱)／ロシア。

**2・2 日本の条約改正(Q)** ロシアによるシベリア鉄道の建設が、イギリスのアジアにおける既得権益を奪いかねないというイギリス側の認識があった。

**3 「統治20年の回顧」(『台湾日々新報』1915年6月)(Q)** 抗日勢力を掃討し、また警察制度の導入による治安維持、司法・行政・財政・金融・教育などの近代化政策の実施や、鉄道道路のインフラ整備、保健衛生の向上を進めたり、製糖産業などの産業の育成をおこなった。こうした台湾に対する政策は、大人である日本が子どもである台湾を指導・育成し、導くという認識のもとなされた。

p.220～221 第2次産業革命と帝国主義① 欧米列強と帝国主義

**テーマの問い** 列強で工業化が進み、国内で巨大企業が市場を独占的に支配し、さらに各国間でも競争が激しくなると、資源供給地や輸出市場として、植民地が重要視されるようになり、植民地獲得競争が激化した。

**2・2 独占資本による議会支配(Q)** 共通して書かれているのは、TRUSTという文字である。アメリカでは独占資本の中でもトラストが多く、トラストが議会の牛耳っている様子を描いている。

**3・3 帝国主義に関わる言論(Q)** 日本は日清・日露戦争をおこし、中国での租借地や利権獲得競争にも参入してきており、また中国人も義和団事件やそれに便乗した宣戦布告で、白人に対して武力蜂起している。これを放っておくと黄色人種と白人の戦争がおこるに違いないとヴィルヘルム2世は考えている。一方で森鷗外は、白人たちが中国でおこなっていることは人道に反し、国際法にも反しており、黄色人種よりも、よっぽど白人こそが「禍」だと主張している。

p.222～223 第2次産業革命と帝国主義② 帝国主義時代の欧米列強の政治と社会

**テーマの問い** ヨーロッパ各国、アメリカ合衆国で大衆文化が生まれた。地下鉄、アパート、高層ビルなどが誕生した。また労働者の増加で社会主義政党が勢力をのぼし、一時期はマルクス主義が広まったが、のちに議会を通じた社会主義化がめざされるようになった。またアメリカ合衆国への移民増加によって、合衆国の移民政策にも影響が出た。

**4・2 社会民主党の変化(Q)** 左の史料においては、「階級支配および階級そのものの廃止のために」とあり、革命を示唆する内容であるが、右の史料は、「議会の権力を用いなければなりません」とあり、議会を通じて国民の権利を得ることをめざしていることがわかる。同じ社会民主党であるが、後者は修正主義といわれる内容である。

**7・2 各国の対外投資(Q)** イギリスは、保険や海運、投資、電信などのサービス業で利益を出していた。

p.224～225 列強の世界分割と列強対立の二分化

**テーマの問い** ドイツとロシアの再保障条約の期限が切れた後、フランスとロシアは露仏同盟を結んだ。また、アフリカの植民地争奪をめぐるスーダンで英仏がファショダ事件をおこすもフランスの譲歩により戦争は回避され、1904年に英仏協商を結んだ。日露戦争後は、ロシアと英露協商を結んだ。このようにして、三国協商が結ばれた。一方でビスマルク引退後のヴィルヘルム2世は、アフリカでの植民地獲得のために2度に渡るモロッコ事件をおこしたが、英仏との対立を深めた。またバルカン半島をめぐる、同盟国のオーストリアとともにロシアとの対立を深めた。

**1・3 ローズ(Q)** アフリカで植民地拡張政策をおしすすめたローズが、イギリス領だったエジプトと南アフリカを踏みつけ、ライフルを背負い電信線を南北に敷設している。イギリスがめざしたアフリカ縦断政策を示している。

**1・4 ファショダ事件の風刺画(Q)** この風刺画では、お婆さんに化けた狼がベッドにいる。鉄兜をかぶり、ベッドの横の盾には「アルピオン」(イギリスの古い名称)と書いてあるので、イギリスを表している。赤頭巾ちゃんは三色のたすきをかけているからフランスを表し、狼がねらっている構図になっている。

**4・1 棍棒を振り回すセオドア＝ローズヴェルト(Q)** アメリカの国益のためなら軍事介入も辞さない、という帝国主義外交を示している。「穏やかな口調に加えて、棍棒をもって行け。そうすればうまくいく。」というセオドア＝ローズヴェルトの言葉から「棍棒外交」といわれた。実際に、ドミニカ、ハイチ、メキシコなどのカリブ海地域に海兵隊が派遣され、軍事的・経済的な干渉がおこなわれた。

p.226～227 アジア諸国の変革と民族運動① 東アジア

**テーマの問い** 日清戦争の結果、清は、朝鮮の宗主権を失い、さらには列強に借款を負い、租借地を認め、鉱山採掘権、鉄道敷設権などの利権も認めた。日露戦争後は、清は日本の影響のもとに光緒新政を始めるが、失敗に終わり辛亥革命を引き

おこした。日本は、日清・日露戦争後、朝鮮への進出を強め、日韓議定書、3次に渡る日韓協約(第2次で保護国化)の後、1910年に併合した。

**2・2 康有為『日本変政考』** **Q** 日本明治維新をモデルとし、国会開設や憲法制定による立憲君主制の樹立をおすすめることで清を立て直そうとした。

**2・4 義和団戦争に出兵した8カ国連合軍** **Q** 当時イギリスは南アフリカ戦争で、アメリカはフィリピン戦争で忙殺されており、地理的に近い日本とロシアが主力となった。

**3 ネルーの日露戦争観** **Q** 日本は日露戦争に勝ったことで、アジアもヨーロッパに勝てることを示し、アジアの国々全体に希望を示す存在としてみられたが、その後の朝鮮などへの行いによって、欧米列強と変わらない帝国主義国の一国にすぎないと考えられるようになった。

**5 孫文「国事についての遺言」** **Q** 政府には全国を统一的に支配する力はなく、列強の支持を受けた軍閥が各地で割拠して互いに抗争し、北京政府の実権を争奪する不安定な状況であった。

## p.228～229 アジア諸国の変革と民族運動② 南・東南・西アジア

**テーマの問い** インドでは、ベンガル分割令を機に、国民会議でティラクラの急進派が主導権を握るようになり国民会議派として民族運動を主導した。インドネシアでは現地人官吏養成のための専門教育を受けた現地有力者の子弟たちのなかで民族的自覚が芽生えた。また、ムスリムの知識人たちによってイスラーム同盟も結成され、民族運動で活躍した。フィリピンでもフィリピンやスペインで高等教育を受けたフィリピン人たちが民衆の啓蒙運動を始め、ついにはフィリピン革命をおこした。この時期の民族運動は、宗主国の教育を受けた人々が、民族意識に芽生えて民族運動を形成していく傾向がみられる。

**2 アジア・アフリカにおける植民地化に対する抵抗運動** **Q** ベンガル州をヒンドゥー教徒多住地域とイスラーム教徒多住地域に分割し、宗教対立を利用して民族運動の高まりをそらそうとした。

**4・1 「光は暗黒を越えて」—カルティニの手紙—** **Q** 何よりもまず、ジャワの郷土と民族への愛と喜びをもち、ジャワの郷土や民族と苦しみを分かち合おうとする魂をもったジャワ人。

**4・3 ドンズー(東遊)運動** **Q** 植民地当局がベトナム国内で取り締まりを強化し、さらに1907年に日仏協約が結ばれた後、フランス政府の要請で、日本での取り締まりが強化され、運動は終息した。その後はシャム(タイ)や中国に活動の拠点を移した。

## p.230～231 第一次世界大戦

**テーマの問い** バルカン半島における民族対立と列強の利害対立からサラエヴォ事件がおこり、第一次世界大戦が始まった。この戦争は史上初の総力戦で、戦場で戦う兵士以外に女性や植民地も何らかの形で戦争にかかわった。

**3 出征するドイツ兵** **Q** 戦争の終結は1918年11月11日、すなわち4年後のクリスマスによく帰ることができた。

**4・1 新兵器で負傷したイギリス兵** **Q** ドイツ軍は塹壕戦の膠着状態を打破するため、1915年4月のイーブルの戦いで史上初めて毒ガス兵器を使用した。このとき使用されたのは、人体の皮膚や粘膜をただれさせる作用をもち、マスタードガスと呼ばれる。写真は、毒ガスによって目を負傷したため、前の兵士の肩に手をかけてようやく歩いているイギリス兵を撮影したものである。

## p.232 総力戦

**2 絵葉書やポスターに描かれた女性や子ども** **Q** 女性や子どもが戦意高揚などに利用されている。その背景には、「強い男を支える子ども」という旧来の価値観があったと考えられる。

**5 社会主義勢力の動向** **Q** 階級闘争と労働者の国際連帯よりも自国の勝利を優先する態度を示した。

**6 第一次世界大戦と植民地** **Q** 公債購入という形で戦費を支えたり、召集されて兵士として前線へ出たりした。

## p.233 日本と第一次世界大戦

**1 二十一カ条の要求** **Q1** 第1号は、ドイツが山東半島でもっていた権益をそのまま日本に認めること。第5号は、中華民国政府に対し、日本人の政治・財政・軍事顧問の就任を要請すること。

**1 二十一カ条の要求** **Q2** 帝国主義をとる欧米諸国も同様の事例を抱えているため、日本だけを責めることは難しかった。勝敗が決していない段階で対独戦争に加わり、アジアにおけるドイツの脅威を取り除いた日本の貢献への見返りもあり、秘密裏に求めた中国の保護国化をねらう第5号を除き、欧米諸国は日本の要求に対して宥和的であった。

## p.234～235 ロシア革命

**テーマの問い** 社会主義国家の成立は、資本主義国家とは別の可能性や資本主義の問題点を修正する契機となった。しかし、革命の波及を恐れる資本主義国家は、軍事干渉をおこなって革命の転覆をはかった。

**4 一掃するレーニン** **Q** 皇帝ニコライ2世、聖職者、資本家。

**解説** 「同志レーニンは地球からゴミを掃除する」と題された風刺画。ゴミとされているのは、皇帝ニコライ2世(王冠の人物)、聖職者(左下)、資本家(右下)である。これらは、いずれも旧権力の象徴であり、レーニンの一掃によって、新しい社会が到来したことをロシアの人々に訴えている。なお、皇帝が2カ所に描かれているのは、右下の逃亡している絵が二月革命で退位したことを示し、その下の転倒している絵が十月革命後に処刑されたことを示している。

**4 新経済政策(ネップ)と物価** **Q** バンの価格が15%割引であるということ。

## p.236～237 ヴェルサイユ体制下のヨーロッパ

**テーマの問い** 国際連盟というそれまでの同盟関係とは異なる集団安全保障機関による世界平和の構築や不戦条約などによる軍縮の気運が高まった。大戦後、欧米を中心に女性の社会進出が進み、参政権を求める運動も高まった。

**2 我々が失うもの** **Q** ドイツでつくられたヴェルサイユ条約に反対するポスター。左から、領土・人口・石炭生産・穀物生産・鉄鉱石資源など失われるものとその減少率が示されている。また、左下にすべての海外植民地を失ったことも示されている。

## p.238 第一次世界大戦後の東欧・女性の社会進出

**テーマの問い** チェコスロヴァキアを例外として、強権的な独裁政権であったことが特徴といえる。その理由としては、東ヨーロッパに反共的な政権を樹立することで、西ヨーロッパにロシア革命の影響がおよぶことを防ぐことがあったと考えられる。

**1・4 小協商条約** **Q** 敗戦によって領土を縮小されたハンガリーが、領土回復のために戦争をおこすことを牽制するために結ばれた。

**2 選挙法改正を求める女性たち** **Q** 女性も男性と同じく21歳以上で選挙権を得られることを求めている。

## p.239 戦間期のソ連

**テーマの問い** レーニンの死後、権力を握ったスターリンのもとで急速な農業の集団化や工業化を進め、生産力を高めていった。

**1・2 レーニンの遺書によるスターリン評** ① 考えていなかった。むしろ、トロツキーをふさわしいと考えていた。

**1・4 ソ連工業の推移(銑鉄生産量)** ① 産業の推移は、1918～21年にかけての戦時共産主義で労働意欲の低下により下降したが、1921年から施行されたネップによって回復した。その後は、1928年から始まった第1次五カ年計画などによって順調に発展をとげた。

**1・5 人口1人あたりGDPの国際比較** ① イギリスの経済力が低下し、世界(国際)経済の中心としてアメリカの存在感が相対的に高まった。

**1・5 人口1人あたりGDPの国際比較** ② 総力戦のもとイギリスやフランスは停滞、敗戦国ドイツは戦後の混乱や賠償負担が打撃となり、日本は戦後恐慌に見舞われた。世界恐慌により、資本主義国が大きく落ち込む一方、ソ連は計画経済によって成長を続けた。

## p.240～241 1920年代のアメリカ合衆国

**テーマの問い** アメリカ合衆国では、都市を中心に大量生産・大量消費をもととした大衆文化が形成された。一方で、移民排斥や人種差別団体の復活など、社会の保守化も進んだ。

**1・2 移民排斥** ① 左はアメリカ西海岸に進出する日系移民、右はそれをくい止めるアメリカ合衆国を表している。

**2・1 華やかな都市の生活** ① ジャズ音楽、ダンスホール、サーカス、映画、プロスポーツ(ここではボクシング)観戦など。

## p.242～243 東アジアの民族運動

**テーマの問い** 東アジアにおける反植民地・反帝国主義的性格の民族運動は、社会主義的な性格の有無を問わず、日本の東アジア進出に対する反発を前面に出して進められた。

**2・1 胡適** ① 「文学改良芻議」昔の文体や表現を古文を模倣せず、口語文を用いて明らかな内容(書く目的)をもった文章を書くこと。

**4 三・一独立宣言** ① 第一次世界大戦後に世界各地で民族運動が高まったこと。

**5 第1次国共合作** ① 左から、中国国民党旗・孫文の肖像・南京国民政府旗(のちの中華民国国旗)が掲げられている。

## p.244～245 戦間期の日本

**テーマの問い** 大衆の政治参加が進み社会運動も活発化するなかで、男性普通選挙が実現したが、社会主義勢力への規制は続いた。経済面では、戦後恐慌以降の混乱のなかで財閥の産業支配が進行した。

**1・2 治安維持法** ① 社会主義者や無政府主義者に代表される、天皇制や私有財産制度を否定する人々を対象とした。

**1 吉野作造の民主主義** ① 民主主義は、社会民主主義など君主制を否定する語にも用いられるので、それとの混同を避け、天皇制のもとでも民衆が政治に参加できる概念として用いた。

## p.246～247 インド・東南アジア・西アジアの民族運動

**テーマの問い** 各植民地の領域内の人々を、インドネシア人・トルコ人といった一つの民族とみなして、独立運動を進めた。インドネシアやベトナムの民族運動は、社会主義勢力が中心となっていた点に特徴がみられる。

**2 ガンディー『剣の教養』** ① 非暴力によってインドをイギリスから独立させること。

**3 インドネシア共産党** ① 宗主国の言語であるオランダ語で

書かれている。

**4・2 ムスタファ＝ケマル** ① 西洋の文化や価値観も必要な部分は受け入れるという側面。

## p.248～249 特集 パレスチナ問題

**2 フェイン・マクマホン協定** ① 旧オスマン帝国領について、フェイン・マクマホン協定ではアラブ人の独立国家、サイクス・ピコ協定では英仏露による勢力範囲の分割、バルフォア宣言ではユダヤ人国家の民族的郷土の設立を認めている。これらは、とくにパレスチナ地域において深刻な課題を抱えていた。

**2 バルフォア宣言** ① イギリスは、ユダヤ人国家建設を認めることで、第一次世界大戦を継続するための費用をユダヤ資本から引き出そうとした。

## p.250 世界恐慌

**テーマの問い** 世界的な農業不況やアメリカ合衆国での過剰生産による経済の停滞が、株価の大暴落を引き起こした。恐慌におちいったアメリカ合衆国がヨーロッパなどから資本を引き上げたことでヨーロッパ諸国も恐慌にみまわれた。

**1 イギリスへの恐慌の波及** ① 直接的には恐慌の影響で操業を停止した工場を表しているが、その影響で失業者が増えていることも表している。

## p.251 日本の中国侵攻

**テーマの問い** 蔣介石率いる国民政府は、国内の共産党勢力を打倒することを優先していたが、1936年の西安事件を機に第2次国共合作が成立して内戦を停止し、日本の侵攻に対して統一して戦うようになった。

**1・3 満洲国建国ポスター** ① ポスターに描かれているのは、左から漢人・朝鮮人・満洲人・モンゴル人・日本人。彼らが肩を組み、両端の人物が満洲国旗をもっているのは、満洲国がこれらの民族の共存により、発展していくことを訴えている。これは、「五族協和」という言葉で示され、あわせて「王道楽土」というスローガンも掲げられ、徳治主義による理想的な国家の建設もとなえられた。しかし、これらは、満洲国の傀儡国家性を隠すためのプロパガンダで、実態は、関東軍司令官(関東庁長官と駐満日本大使を兼任)が事実上の権力を握り、日本から派遣された高級官僚がそのもとで行政実務を担っていた。これらから、満洲国は日本の事実上の植民地であったとみることもできる。

## p.252～253 ファシズム諸国の侵略

**テーマの問い** 第一次世界大戦後の経済の低迷や共産党勢力の台頭に不安感を高めた人々に対して、自民族の優越性を強調するなどの手段で独裁的な権力を握った。その後、自国民の生存圏を拡大するために対外侵攻を進めた。その過程で、共産主義者やユダヤ人などを国家統合の障害物とみなして、迫害を強めていった。

**3 ムツソリーニ『ファシズム原理』** ① 国家を重視している。

**4 全権委任法** ① 民主主義(民主政治)の基本である三権分立を反故にして、行政府が議会とは別に法律を制定できるようにした点。さらに、行政府の制定した法律が憲法に違反しようと規定していることから、憲法を無力化し、政府による独裁の危険性を高めている点。

**4・1 ヒトラーのポスター** ① ヒンデンブルク大統領の任命により首相となった、すなわち大統領に従うという立場から、総統としてドイツの最高指導者という立場にかわった。

**5 『ゲルニカ』** ① 雌牛はファシズム(フランコとそれを支援するドイツ・イタリア)、馬は人民(それに抵抗する人民戦線側)

のシンボルといわれる。

## p.254～255 第二次世界大戦①

**テーマの問い** 宥和政策をとり続ける英仏の態度に不信感をもったソ連が、ドイツと不可侵条約を結んだことで、ドイツはポーランド侵攻に踏み切ることができた。これにより、ポーランドと同盟を結んでいた英仏もドイツに宣戦し、ドイツと同盟を結んでいたイタリアも英仏と戦争することとなった。日本は長引く日中戦争の戦局を打開するため、日独伊三国同盟を結んで仏領インドシナに侵攻したが、アメリカ合衆国による経済制裁を引きおこした。これを解決するための日米交渉が行き詰まったため、対米英開戦に踏み切った。

**1 ミュンヘン会談時と独ソ不可侵条約締結時の風刺画** **Q** ヒトラー率いるナチ党の方針の1つに、反共産主義があった。また、イギリス・フランス両国もソ連の動きを警戒していた。それゆえ、1938年のミュンヘン会議では、フランスと同様にチェコと相互援助条約を結んでいたにもかかわらず、ソ連は会議に招かれなかった。風刺画でスターリンの座席が用意されていないのは、そのことを表している。しかし、翌39年のチェコスロヴァキア解体を機に英・仏との関係が悪化すると、ヒトラーは一転して同年8月に独ソ不可侵条約を結び、英・仏との対決姿勢を強めた。

## p.256～257 第二次世界大戦②

**テーマの問い** 三国同盟側は、当初優位に戦局を進めていたが、ミッドウェー海戦やスターリングラードの戦いの敗北により退勢に転じ、イタリア・ドイツ・日本の順で連合国に降伏した。

**1・1 2匹の大蛇** **Q** 左の大蛇がヒトラー、右の大蛇がスターリンを表している。ふくれた腹にはそれぞれが併合した国名が書かれており、大蛇の大きさの違いは、ドイツとソ連の国土の広さを示している。**解説** この絵は、独ソ不可侵条約の秘密協定を非難する風刺画である。左の大蛇がドイツのヒトラー、右の大蛇がソ連のスターリンを表していることは、それぞれの髪型やヒゲから読み取れる。大蛇の大きさの違いは、ドイツとソ連の国土の広さを示している。ふくれた腹に注目すると、右の大蛇の腹にはオーストリア・チェコスロヴァキア・ポーランド、右の大蛇の腹にはバルト三国(ラトヴィア・リトアニア・エストニア)・ポーランドの文字が読み取れる。両者は隣接する国を次々と併合してにらみあっており、それは、来たるべき独ソ戦を予感させる絵であるとも読み取ることができる。

**1・2 ド=ゴールの演説** **Q** ヴィシー政府を認めないこと。ドイツの占領に対して徹底的に抵抗すること。

## p.258～259 第二次世界大戦③ 戦時下の日本

**テーマの問い** 日本は、日中戦争開始後から総力戦の準備をおこなっていたが、太平洋戦争が始まると、戦争の規模が拡大したことなどにより、当初の想定を超えた総力戦に突入した。そのため、食料を含む極端な物不足となり、国民はより厳しい窮乏生活を強いられた。また、勤労動員などにより女性や子どもも戦争にかかわらざるを得ない状況におかれた。

**1・3 皇国臣民の誓詞** **Q** 総動員体制を強化するため、朝鮮人も日本の天皇の臣民であるということ強く意識させようとした。

**3・1 配給食品日記** **Q** 食料が日ごとに乏しくなり、主食の米が麦やマメなどの雑穀におきかわったこと。肉の配給はなくなり、魚の配給も減るなど副菜となる食材も減っていった。

## p.260～261 戦後世界秩序の形成

**テーマの問い** 第二次世界大戦後の世界では、国際平和を求める試みが進められた。一方、大戦末期から現れはじめた米英とソ連の対立から、米ソ両大国による冷戦構造の形成も進んでいった。

**1 大西洋憲章** **Q** 侵略的な領土拡大や独裁的な政権を否定し、そのためにも世界的な経済協力が必要であること。世界平和のために、ナチ党政権を打倒する必要があること。

**3 チャーチルのフルトン演説** **Q** ソ連が東ヨーロッパへの勢力を拡大して、西ヨーロッパと分断しようとしていること。

**3 トルーマン=ドクトリン** **Q** ギリシアやトルコでソ連の影響を受けた共産主義勢力が力をのばしていること。これらの国が共産化するとヨーロッパ他地域にも共産化の波が押し寄せるという危機感。

**3 コミンフォルムの結成** **Q** アメリカ合衆国による共産党勢力への封じ込め政策が強化されることに対して、各国の共産党が連帯して対抗すること。

## p.262～263 アジア諸地域の独立

**テーマの問い** 多くの地域では、宗主国とのあいだで独立戦争がみられた。また、冷戦の影響で、朝鮮半島やベトナムのように国家が分断される地域も現れた。

**3・2 ベトナム独立宣言** **Q** アメリカ独立宣言やフランス人権宣言にある「自由」「平等」の概念を援用して、すべての国や地域も平等であるのだからベトナムの独立も正統なものであると訴えている。

**6 ガンディー暗殺** **Q** ガンディーの姿勢に反感をもったヒンドゥー教過激派によって殺害された。

## p.264 朝鮮戦争

**テーマの問い** 朝鮮戦争は、冷戦の激化を体現する事件の1つであった。アメリカは、日本を西側陣営に組み込むため、独立後も日米安全保障条約によって日本駐留を継続した。

**2 朝鮮特需** **Q** アメリカ軍が使用する兵器をつくっている。

## p.265 米ソ冷戦の激化

**テーマの問い** 東西両陣営による同盟関係の強化や軍拡競争は、一方で反核運動も生み出した。

**2 「ババは何でも知っている」** **Q** アメリカの豊かな白人中産階級と当時理想とされていた家父長的な家族像を放映することで、日本も豊かな社会を実現したいならアメリカが必要であるということ刷り込むため。

## p.266 西欧の経済復興

**テーマの問い** 西ヨーロッパ諸国は、アメリカ合衆国との同盟関係を維持する一方、経済復興や国際的地位を固めるためにヨーロッパ統合を志向するようになった。

**3 西ドイツの再軍備** **Q** アメリカ製のジェット機。アメリカが自国製の兵器を西側諸国に供与することは、軍需産業の要求にこたえる面もあった。

## p.267 「雪どけ」

**テーマの問い** 「雪どけ」は、米ソの接近をもたらした。一方、東ヨーロッパでは非スターリン化が進んだが、それに対してソ連は武力弾圧を強行することもあった。

**1 フルシチョフのスターリン批判** **Q** スターリンを批判することによって、自身がスターリンよりすぐれた指導者であることをアピールし、政府内の権力を確立するため。批判の対象は、スターリンが個人崇拜を強要し、服従しないものに対しては暴力的手段をもって排除しようとした点。

**2 ベルリンの壁** 東西ドイツ成立後、西側の飛び地ともいえる西ベルリンを経由して亡命する東ドイツ国民の増加が問題となったため。

### p.268～269 第三世界の台頭と米・ソの歩み寄り

**テーマの問い** 第三世界の台頭は、欧米諸国以外にも国際社会に大きな影響力をもちうることを示した。このような状況下でおこったキューバ危機をきっかけに米ソは平和共存路線を模索するようになった。

**1 アジア＝アフリカ会議(バンドン会議)** 開催国インドネシアのスカルノ大統領。

**1 第1回非同盟諸国首脳会議** 非同盟とは、米ソいずれの陣営にも属さず、中立主義と反植民地主義の立場に立つという意味である。

### p.270～271 ベトナム戦争とインドシナ情勢

**テーマの問い** 国際的な反戦運動の高まりや戦争の長期化による経済の悪化によって、アメリカ合衆国の国際的な威信が低下した。

**1・3 北爆** 沖縄とグアム島が重要な発進基地の役割を担っていた。

**1・3 枯葉作戦** 枯葉作戦に用いた化学物質による先天的な障害をもつ子どもを多く生み出す結果をもたらしたため。

**1・4 ベトナム和平協定** いえない。この協定では、アメリカ合衆国がベトナムから撤退することになったが、南北の内戦は終結していなかった。

### p.272～273 米ソの動揺とヨーロッパの変化

**テーマの問い** アメリカ合衆国における公民権運動やベトナム反戦運動、東ヨーロッパにおける「プラハの春」やルーマニアの自主外交路線など既存の政治体制や価値観に対する疑問の高まりがあった。

緊張緩和の高まるなかで、西ヨーロッパでは社会主義的な政策を掲げる政党の勢力が一定程度のびた。また、第二次世界大戦後も独裁体制をとっていた国で民主化の流れが加速化した。

**2 コカ＝コーラの自動販売機** 自動販売機に“WHITE CUSTOMERS ONLY”(白人専用)と書かれている部分。

**3 「プラハの春」——市民による二言語宣言** 共産党勢力が、人民の期待から離れて党の権力を維持するだけの組織となってしまうこと。

**3 プレジネフ＝ドクトリン(制限主権論)** 社会主義諸国全体の安全が優先されると考えている。

**4 五月革命** 花をかたどっている風船は、実力による運動弾圧を非難し、対話による解決を求めていることの象徴とみることができる。

**4 東西ドイツ基本条約** 東西ドイツそれぞれが独立した国家として存在し、相互のその地位や国内の政治体制を尊重すること。

### p.274 中国の動揺と、アメリカ・日本との接近

**テーマの問い** 中ソ論争でソ連との関係が悪化したことに加え、大躍進からプロレタリア文化大革命によって混乱におちいつている国家の建て直しをはかるため。

**2 米中共同声明** 国際紛争を武力的手段を用いることなく解決すべきこと。そのために、両国がアジア太平洋地域で覇権を求めべきではないこと。

**2 日中共同声明** 日本は中華人民共和国政府が中国の正統な政府であり、そこに台湾も含まれると認めた。中国は日本に対する戦争賠償の請求を放棄した。

### p.275 アジア諸地域の経済発展と民主化①

**テーマの問い** 軍事力を背景にした独裁政権が、国内の民主化勢力などを暴力的に弾圧して経済成長政策を進めた。このような政策を開発独裁という。

**2・2 アジアの経済成長率** アジア諸地域の経済成長は、国内事情だけでなく、国際経済の動向にも左右される。前者の代表例が1990年から93年にかけて日本が急激に落ち込んでいる部分で、これはバブル経済の崩壊による不況によるものである。後者の代表例は、グラフ中に2カ所みられる。最初は、1997年のタイに始まるアジア通貨危機で、これはアメリカ合衆国を中心とした投資家の行動に影響を受けたものであった。次は、2008年のリーマン＝ショックとも呼ばれる世界同時不況の影響による落ち込みである。これは、アメリカ合衆国の投資銀行の経営破綻をきっかけにおこった。

**2 インドの市場開放政策** 計画経済から脱して企業間の自由競争によって生産性や効率を向上させること。外国からの直接投資を積極的に受け入れること。

**2 ASEANの地域統合** インドシナ諸国やミャンマーなどASEAN内での経済後進諸国が経済成長を進めて、域内の経済格差を小さくすること。

### p.277 ラテンアメリカの民主化

**テーマの問い** 開発独裁によって一定の経済成長を果たすと、人々は次に民主的な社会を望むようになり、1980年代頃から民主化が進んだ。

### p.278～279 石油危機と世界経済の再編①

**テーマの問い** 石油を大量消費する産業や生活スタイルを改めて省エネルギー化を前提とした経済成長の可能性が追求されるようになった。また、人々は環境問題への注目を強めるようになった。

**1 国連人間環境会議・ストックホルム宣言** 科学技術の進歩を人間の生存を支えることだけでなく、自然環境を保全することにも人類全体で取り組む必要があること。

**3 新自由主義の担い手たち** 左から、日本の中曽根首相、イギリスのサッチャー首相、アメリカのレーガン大統領。

**4・1 イラン＝イスラーム共和国憲法** 三権分立に立脚した大統領制ではあるが、いずれもイマーム(イスラーム法学者)の監督下におかれている点。

**4・2 イラク外相から国連安保理議長宛の書簡、イラン大統領から国連事務総長宛の書簡** 両国とも相手の挑発や軍事行動などに対する自衛のための戦争であると主張している。

### p.280 石油危機と世界経済の再編②

**5 戦争柄絨毯** 手織り絨毯は、アフガニスタンだけでなくトルコやイランでもみられる代表的な伝統工芸(⇒本文p.125)で、写真の絨毯もミニアチュールの構図が用いられている。しかし、そこに織り込まれているのは、伝統的な花や鳥などを図案化したものではなく、戦車やヘリコプターといった現代の軍事兵器となっている。1979年にソ連がアフガニスタンの社会主義政権を救援するために軍事侵攻して以降、アフガニスタンでは絨毯の図柄にこのような戦争柄が織り込まれるようになった。この絨毯では、白鬼として表されているソ連兵をアフガニスタンの抵抗軍が剣で倒している様子が表現されている。このように、アフガニスタンの人々は、伝統工芸を通じてソ連の侵攻に抵抗していたと考えられる。

**6 中距離核戦力(INF)全廃条約** 核戦争が全人類に破滅的結果をもたらす危険性を排除するためには、核兵器の廃止が必要であること。

## p.281 戦後の独立から1980年代までの日本

**1 日ソ共同宣言** **Q** ソ連と国交が回復したことにより国連加盟が実現した。一方、北方領土問題は「平和条約が締結された後に現実に引き渡される」とあるように棚上げとなったため、現在でも日ソ両国の懸案事項となっている。

**3・1 日米貿易摩擦** **Q** 当時、家電製品とともに貿易摩擦の象徴とみなされていた日本製の乗用車。

## p.282～283 社会主義世界の変容

**テーマの問い** 計画経済の硬直化による物不足や資本主義国と比べて民主化の進んでいない状況に不満を高めた国民の行動が社会主義諸国の改革路線をうながし、最終的には社会主義諸国自体の体制転換や解体をもたらした。

**1 リトアニアの独立運動** **Q** 「1920・レーニン」はロシア革命後の独立、「1939・スターリン」は独ソ不可侵条約後のソ連による併合を表している。そして、「1990・ゴルバチョフ」とは、独立をソ連が認めるのかという問いかけとなっている。

**1 資本主義の勝利?** **Q** 資本主義の勝利は、一面で社会格差の放置となる恐れがあることを風刺している。

**2 新ベオグラード宣言** **Q** プレジネフ以来の「制限主権論」(→本文p.273)を否定し、社会主義の多様性を認めた。

**2 東西ドイツ統一条約** **Q** 東ドイツを西ドイツの一地方として編入することで統一を達成した。

## p.284～285 アジア社会主義国家の変容

**テーマの問い** 社会主義を掲げて国家を強引に統合する一方で、市場経済の導入による経済成長政策を進めて、経済面での国民の不満をかわそうと試みている点が見られる。

**1・2 経済特区の設置** **Q** アメリカ合衆国を象徴する衣料の1つであるジーンズを製造している。

**1 2010年のノーベル平和賞授賞式** **Q** ノーベル平和賞は、ノルウェー国会の任命する独立委員会によって選考・授与される。その対象者は、国際平和や軍備縮減だけでなく、人権擁護や環境保全など幅広い分野におよぶ。2010年は、中華人民共和国の人権活動家である劉曉波リウシャオハが受賞した。劉は、1989年の天安門事件に参加し、事件後も中国にとどまって人権活動を進めていた人物である。このことは、一方で、人権意識の低さをしばしば批判されている中国政府を刺激することとなり、劉は出国許可を得られず、授賞式への参加は叶わなかった。そのため、授賞式では劉のパネルが掲げられ、空席に賞状とメダルがおかれた。

**3 陳水扁総統就任演説** **Q** 中華人民共和国が武力を発動しない限り、「二つの中国」(=台湾独立)を進めるような政策をおこなわないので、対話を続けようということ。

## p.286～287 地域紛争の激化と貧困問題

**テーマの問い** 資本主義や社会主義といった政治や経済の対立にかわって、宗教や民族の違いによる対立が地域紛争の大きな原因となっている。

## p.288～289 グローバリゼーションの進展

**テーマの問い** 冷戦の終結や情報通信革命の進展により、世界中の人々が同じ情報を共有できる可能性が高まったことがある。一方で、グローバリゼーションの進展による世界の均質化に対する抵抗運動も引き起こした。

**3 シャンゼリゼ通りを行進するドイツ軍** **Q** フランス国民、とくにパリ市民にとって、ドイツ軍の「シャンゼリゼ通り行進」は、第二次世界大戦時の1940年6月におけるパリ占領を思いおこさせる光景であった。ヨーロッパ統合に向けて新たなフランスとドイツの関係構築をめざした当時のフランス大統領

ミッテランは、パリ解放50周年の節目にあたる1994年、7月14日の革命記念日にドイツ軍によるシャンゼリゼ通りのパレード実施を決断した。かつてのパレードと異なり、三色旗の林立する通りを、フランスのブジョー製造の軍用車にドイツ国旗を掲げてパレードするドイツ軍の様子から、両国がヨーロッパ統合の中核を担うパートナー同士となったことを示している。

**4・3 グローバリゼーションへの抗議** **Q** ハンバーガーは、グローバリゼーションの中心とみなされたアメリカ合衆国の代表的な料理で、ファストフードチェーンによって世界中に広がっている。すなわち、グローバリゼーションの象徴と考えられていたため。

## p.292～293 現代文明の諸相② 大衆文化、ジェンダー

**国連女性の10年** **Q** 男女平等を達成するためには、男女両性が伝統的な役割をかえる必要があるということ。